
俺と優子とオーズ

巧

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と優子とオーズ

【Nコード】

N0995U

【作者名】

巧

【あらすじ】

主人公鴻上映司が800年前のグリードとの戦いに巻き込まれる。

第0話俺と優子と昔の約束（前書き）

始めまして巧と言います。

投稿初めてなので読んでくださったら感想かアドバイスお願いします。

／／／↑これは照れです。

第0話俺と優子と昔の約束

回想in

『ねえ優ちゃん』

「ん、なにえー君」

『将来になりたい職業ある？』

「んゝそうだなゝあ！じゃあえー君のお嫁さんになる」

『え！僕のお嫁さん！？』

「えー君は嫌？」

『嫌じゃないよだからそんな悲しそうな顔しないでよ、ね？』

「うんえー君だーい好き」

『え、うわあ優ちゃ、ん！』

勘がいい人なら今の状況がわかるだろう優ちゃんが飛びついてきてそして優ちゃんの唇が僕の唇に重なった少しすると優ちゃんが離れた。

「えへへえー君とキスしちゃった／＼／」

『うゝうん／＼／』

「えー君顔真つ赤にしちゃて可愛い／＼／」

『そう言う優ちゃんだつて顔真つ赤だよ／＼／』

「違つもん顔が熱いだけだもん」

『じゃあもう一回顔赤くしてあげるよ』

そう言つて僕は顔を優ちゃんに近づける。

「えー君／＼／」

『優ちゃん／＼／』

あと少しで唇が付きそうなところで邪魔が入った。

「おーおー将来の義兄上は大胆じゃのう」

『！ひ、秀いつの間に』

「最初からじゃ」

にやにやしなから言う秀を見て思った。

（秀って意外と腹黒い？）

「よかったのう姉上映司にプロポーズされて」

「はうう／＼／」

「おい優ちゃん戻ってこーい」

「じゃあ邪魔者は消えるとするかのう」

「ちょ！秀この状況どうすればいいの」

「がんばるのじゃぞ義兄上」

「ちよと待つてよ」

僕は優ちゃんをおんぶして歩きだす。

（優ちゃん僕が一生守るからね大好きだよ優ちゃん）

回想out

『あの約束してからもう10年か4年ぶりに文月に帰るか』
そうして男はバイクを走らせた。

『優ちゃん可愛くなってるんだろうな』

期待をしながら文月へ。

第0話俺と優子と昔の約束（後書き）

短すぎですかね？。

感想待ってます続きが出来次第更新します。

主人公設定＋召喚獣（前書き）

どーも巧です自分の小説が掲載出来て感動です。

今日は一気に投稿しようと思います自分を書いて思ったんですけどちょっと恥ずかしいです親には見せられないな。

主人公設定＋召喚獣

（オリキャラ設定）

主人公

名前 鴻上こうがみ 映司えいじ

- ・ 2 - F 所属理由は振り分け試験を寝て過ごしたから。
- ・ 優子と秀吉と雄二と翔子と康太は知り合い。
- ・ 現在木下の家の隣に住んでいる両親は違う家で暮らしている家事は出来る。

- ・ 最近の趣味は明久いじりと優子を写真で撮る事。
- ・ 得意科目は保健体育以外の全教科保健体育が苦手な理由はウブだから。

本当なら学年主席。

- ・ 最近の悩みは雄二と翔子をどうやってくつつけるか。
- ・ 外見は上の中

< 召喚獣 >

装備はなぜか制服で武器もないあるのはオーズのドライバー。
腕輪の能力は完全同調。

なぜこんな装備なのかは不明だがなんでも鴻上会長が絡んでるとかいないとか。

主人公設定＋召喚獣（後書き）

こんな感じです感想待ってます。

第1話俺と再開と試召戦争（前書き）

わゝ今日俺暇人だー！自分で言って悲しくなってきました。
まあ本当に今日暇なのでどんどん更新していきます。

第1話俺と再開と試召戦争

『ここが文月学園か』

俺はバイクから降りバイクをマシンベンドーモードにする。

「おいお前」

『突然後ろから声をかけられ振り向くと筋肉隆々の肌が黒い男が立っていたもしまあこいつが康太の言う鉄人なのだろうか確かに康太の言つとおり真夏には見たくないな』

「歯を食い縛れ！」

いきなり筋肉隆々の男が殴って来るが簡単に避けるなぜかわからんが驚いた顔をしている。

「おどろたなまさか俺の拳を避けるやつがいるとは」

『たしかにあなたは鍛えられているだが俺にとっては別に関係ない』

「なるほどさすがライドベンドー第一小隊隊長だ」

『で、あなたは誰ですか？』

「紹介が遅れたな俺の名は西村宗一ここの教師をやっている」

『そうですか俺は今日からここに転入する鴻上映司です今日から卒業までよろしくお願いいたします』

「うむいい心がけたところで鴻上？」

『何でしょうか？』

「お前なんで振り分けテストが0点なのか教えてもらおうか」

『居眠りしたからです』

「はあゝまあいいお前の教室はFクラスだ」

『了解です』

～SIDE雄二～

（ふむ今日中にDクラスは倒せるなよしいちよやるか）

「えゝ今日のホームルームを始める前に転校生を紹介します」

転校生？今の時期に普通ありえないだろまあ手駒になるかならないかの問題だな。

「……女子ですか!」「……」

「残念ながら男子です」

「……くそおおお!!」「……」

こいつらやつぱりバカだな。

「入ってきてください」

ガラ、さあお顔拝見といこう!。

『今日からこの学園に転校してきた鴻上映司だ雄二、康太、秀、久しぶりだなだいたい4年ぶりか?』

「映司!お主今までどこにいたんじゃ」

「……心配した」

「そつだぞ映司お前今まで何処にいた」

『え、何処ってえ』と』

その時誰かの携帯の着信音が鳴った。

『ん、すまんちょっと待ってくれはい、もしもし』

誰だ誰と電話してるんだ?。

『はあ!ヤミーが二体も出ただと!』

ヤミーってなんだ?。

『第一小隊は攻撃第二小隊は援護に回れ俺もすぐにいくからとにかく時間を稼げ』

電話を切つてすぐに走り出そうとする映司を先生が止める。

「鴻上君」

『なんですか!』

「生きて帰ってきてください」

映司がちよと笑う。

『了解』

そして映司は走って何処かに向かいだした。

「……雄二」

「ん?どうしたムツツリー二」

「……映司にカメラを取り付けた」

「本当か!」

(コクッ)

「秀吉」

「ん、どうかしたかの雄二」

「ムッツリーニがカメラを映司に取り付けたいムッツリーニ今すぐ見れるか？」

「……可能」

「見せてくれ」

「……了解」

まず最初に画面に映し出されたのはサメの怪物だった。

「なんだよこれ」

「……わからない」

「これは本当に映し出されてるものなのかのう？」

「……現実」

「でも映司はなんでこんなところに？」

「雄二達何見てるの？」

「映司付けたカメラの映像だ」

「なにこの怪人かつこいい」

「さあ稼ぎますか、変身」

「ぱか」

「みんな援護頼む」

「了解」

「ぱか、ドリルアーム」

「うおおおおお！」

映司がドリルで怪人を攻撃し始めた。

「転校初日に出てきてんじゃねえよ」

「ぱか、プレストキヤノン」

「消えろおおおお！」

どおおおん。

「お疲れ様です隊長」

「みんなけがはないか」

『はい大丈夫です』

『じゃあ俺戻るから今のヤミーの巣を見つけくれ』

『了解しました隊長』

『任したぞ』

そして映司はバイクに乗り戻る。

「映司は何と戦ってるんだ？」

「……わからない」

「もしやこれが映司が消えた理由なのかのう？」

「ねえねえみんな」

「なんだ明久」

「さっきの転校生と知り合いなの？」

「ああ、翔子関係だな」

「……秋葉原であつた」

「幼馴染じゃ」

「……なんだと！」「……」

「異端審問会の準備しろ！」

「……」「……うおー！」「……」

「やめとけ」

「なぜだ坂本木下と幼馴染なんだぞこれは許されることではない」

「あいつの名字を聞いてたのかお前ら鴻上だぞ鴻上」

「なに鴻上って？」

「お前本当にバカなんだな」

「なんだと！バカ雄二」

「まあいい明久鴻上ファウンデーション知ってるか？」

「うん、あの大きな会社だよね」

「あいつはそこの会社の社長の一人息子だそいつに手出しすればどうなるかな？」

「やめておこつ」

「第一あいつはノーマルだ」

「何言ってるのさ雄二秀吉は女の子だよ？」

『誰だ今秀の事女って言ったのは!』

「映司お帰りじゃ」

「ん、このバカだ」

「雄二何を!」

『ほうお前が言ったのか』

「ごめんなさい許して」

映司はサムズアップしていた指を。

『答えはNOだ』

下に向けた。

「相変わらず強いな」

『ん、そうか?それと康太カメラ返すぞ』

「……気づいてたのか」

『当然だ康太、雄二このバカ名前なんて言うんだ?』

「明久だ吉井明久」

『明久とやら』

「な、なに」

『秀が友達なら秀が気にしてるって言うてんじゃねえよ!』

「すいませんでした」

『謝る相手は俺じゃなくて秀だろ』

「秀吉ごめんね」

「もう慣れたからいいのじゃ」

『たくそれとお前らも秀の事女って思ってるのか?』

「……(ぶんぶん)」

『ちゃんと秀は男だから間違っても姉妹とか女とか言ったら西村

先生の補修室に連れてくからな』

「……了解」

『他のクラスにも秀が女と思ってるやつがいるのか?』

「映司」

「SIDE映司」

『なんだ』

「さっきのやつは何なんだ？」

「……俺も気になる」

「わしもじゃ」

「僕も」

『あいつらはヤミー、人の欲望から作られるんだ』

「欲望だと？」

『そう欲望食べたい、人を殺したい、付き合いたい、買いたいこれらすべてが欲望』

「だがなぜそんな奴らがテレビに出ないんだ？」

『あいつらは800年前に封印されたからだオーズの手によって』

「オーズ？さっきのお前が変身した奴か？」

『違うあれはバース、オーズとは全く別のものだ』

「なにが違うんだ？」

俺は懷からセルメダル出して雄二達に見せる。

『これはセルメダルこれはバースに使うオーズに使うのはコアメダルだ』

「セルとコアは何が違うんだ？」

『そうだなこのセルが棒付きアイスのアイスの部分だコアは棒の部分と考えてくれればいい』

「じゃあさっきのヤミーと言うのは？」

『あいつらはセルしかない棒なしアイスだから簡単にセルがとれる』

「コアを持つてるのはどんな奴なんだ？」

『グリードと言う』

「グリード、強欲か」

『あいつらヤミーとかのレベルじゃない恐ろしく強い俺でさえ苦戦する』

「弱点はないのか？」

『弱点か、コアを抜くことだなそうすることで弱くなる』

「そうかそれがお前が4年間いなかった理由か？」

『いや違う旅してた』

「旅？」

『ああいろいろ回った』

「はあ、お前は本当に自由気ままな奴だな」

「うむ、変わっておらんの」

「……同感」

「まあいい、お帰り映司」

「お帰りなのじゃ映司」

「……お帰り映司」

『ただいまみんな』

「それで頼みがあるんだが」

『なんだ？心配させたから今ならなんでも言うこと聞くぞ』

雄二はニヤリと笑い言い放った。

「俺達FクラスはAクラスに試召戦争仕掛けたいと思う」

俺は思った面白くなりそうだと。

第2話俺とバカと召喚獣の装備（前書き）

こんばんは巧です本当ならもっと早く投稿出来たのですが操作ミスして文章全消ししてふて寝してましたそれとナハトさんご指摘ありがとうございます。

第2話俺とバカと召喚獣の装備

『俺、今テストの点数が0点なんだが』

「はあ、0点！どうしてだ、いつもなら翔子より高い点数が出せるのに」

『いやゝテスト受ける前にヤミーが出てさゝ倒してから受けたんだけど疲れて寝ちゃったんだよ』

「……お疲れ様です」

『ありがとう康太』

「まあいいさ回復試験受けてこい、まあその間に終わると思うが」

『そつだ雄二』

「ん、なんだ？」

『俺の召喚獣メンテナンス中で仮の召喚獣使ってるんだけど装備が二年を代表するバカのつて言われたんだ』

「その装備とは？」

『木刀と学ラン』

「おい、明久お前学園長に二年を代表するバカと思われてるぞ」

「たぶん間違いだよ！」

「明久はほつといて回復試験受けてこい」

『了解』

）SIDE吉井）

「みんなもうすぐDクラスに勝てるよ」

「……うおおおお」

（ん、今ならDクラス代表が狙える）

「先生Fクラス吉井明久が「Dクラス佐藤が受けます、サモン」な、近衛部隊！」

「残念だったね船越先生の彼氏君？」

「な、違うつて！」

「さ、照れ屋な彼に祝福を」

「くそ、あと少しだったのに」

「もし佐藤さんが居なくても君には無理だよ」

「そうだろうねだから姫路さんよろしくね」

「はぁ」

「あ、あの」

「ん、姫路さん？確かAクラスはこっち通らなかったよね？」

「あ、あのFクラス姫路瑞希です」

「あ、どうもご丁寧に」

平賀君の思考停止してるな。

「Dクラス代表平賀君に試召戦争仕掛けます、サ、サモン」

「へ、え、あの」

「ご、ごめんなさい」

Fクラス 姫路 瑞希 VS Dクラス 平賀 源二

WIN

DEAD

「「「「「やったあああ！」「」「」」」」」

「まさか、姫路さんがFクラスだなんて」

「ごめんなさい」

「いや、謝らないでいい設備の交換は明日でいいか？」

今日変えろって言うのはひどいよね。

「もちろん明日でいいよね雄二？」

「いやしなくていいDクラスの設備は奪う気はないからのだが、条件がある」

「条件？」

「外の室外機に細工して壊してほしい」

「なぜだ？」

「教師達に睨まれるが悪い話じゃないだろ」

「こちらにとつてはうれしいな」

「交渉成立だな」

「ああ」

そして雄二と平賀君が握手した。

『なんだよ、もう終わりか？』

「映司遅かったな」

『まあ、全教科受けてきたからなこれ俺のテストの点』

「はあゝ相変わらずでたらめな奴だな翔子でもとれねーよ」

『あねさんでも無理か？いや努力すれば誰でも取れる』

「無理だ」

「何点なの？」

「1万点」

「えゝ！うそでしょ！本当だし！」

（SIDE映司）

『まあ、いいや雄二帰っていいのか？』

「ん、ああ、構わない」

『そうかじゃあ秀帰ろうぜ』

「うむ」

俺は最後までDクラス代表の顔を見ようと思ひ見るそこには髪がオールバックの男が立っていた。

『あいつ確か、くそ、ウヴァか』

「その欲望解放『させるかあああ！』ぐう」

俺が叫びながら蹴りを食らわすとウヴァが少し跳んだ。

「くそ、何だ」

『何だじゃねえよ人の欲望そう簡単に使わせてたまるか』

「黙れ」

ウヴァはグリード化する俺はドライバーを取り出しセルメダルを入れる。

『変身！』

『パカ』

「お前バースだったのか」

『さあ稼ぎますか』

『パカ、ドリルアーム』

「俺のコアメダル返せ」

『残念でした俺持ってませ〜ん』

俺はウヴァにドリルで攻撃する。

「ぐああああ！」

『このまま全部メダル出しちまえ』

「くそ、逃げるか」

ウヴァが窓から逃げてったので俺も変身を解除する。

『みんなけがはないか？』

「ああ、大丈夫だ」

『そうか、秀帰るぞ』

「う、うむ」

その場から去って、俺は秀と家への道を歩き出す。

『あ、そうだ、秀』

「何じゃ？」

『優ちゃんに俺が帰ってきたこと言わないでねAクラス戦でばらすから』

「うむ、了解じゃ」

『雄二にも言つといてあねさんに伝わると思うから、それとAクラス戦の前に買い物付き合ってくれない？』

「いいのじゃがなにを買いうのかのう？」

『う、それは／＼／』

「なぜ顔を赤くするのじゃ？」

『その、できれば言いたくないな〜』

「じゃあ行かないぞい」

『わかったよ言うよ耳貸して／＼／』

「何じゃ、ふむふむ、そういうことかのう（にやにや）」

『だから言いたくなかったんだ、秀そういう反応するから／＼／』

「まあまあ映司付き合うから機嫌を直すのじゃ」

『こうなったら今度性別転換剤を秀に飲ましてやる』

「やめるのじゃ！、そんなことをしたらわしはFクラスで完璧に女とみなされてしまうのじゃ」

『それと俺、Bクラス戦出れないかも』

「なんでじゃ？」

『なんでもピラニヤヤミーが出てきてるって話だから巢を見つけないといけないんだよ』

「巢？」

『メズールって言うグリードが作るヤミーは巢を作るんだよ』

「大変じゃのう」

『本当だよしかも親の近くに作るから下手に手出しできないし』

「お疲れじゃ雄二にしっかり伝えとくのじゃ」

『頼むよ』

「そついえば映司、お主家はどこじゃ？」

『ん、秀の隣の家』

「本当なのかのう？」

『嘘を付く理由がない』

「最後に一つ聞きたいことがあるのじゃ」

『なんだ？』

「性熱転換剤を飲ますとか言っておったが持っておるのか？」

『いや、その、実はあるでも一生性別が反転するから世の中に出せないけどな、じゃあBクラス戦が終わったらな』

「うむ」

そう言っただけ俺は自分の家に入った。

『明日から大変だなさっさと寝よ』

そして俺は眠りに付いた。

第2話俺とバカと召喚獣の装備（後書き）

遅れましたすみません今後はもっと早く投稿します。

第3話俺と優子と誘拐！？（前書き）

どーも巧です今回は主人公ブチギレます（笑）では、第二話どーぞ。

第3話俺と優子と誘拐！？

『はあ、巢が全然見つからねえって言うかヤミ、一体出てこないじゃないか』

「我慢してください隊長」

「そうそう」

「いいじゃないですか平和ってことで」

『暇だ！これなら今日休んだ意味なくね！？』

「そうですね」

「ないない」

「留年しないようにね」

『ん？携帯鳴ってる、はい、もしもし』

『……映司』

『その声あねさん？』

『……映司落ち着いて聞いて』

『どうかしたの？』

『……優子が誘拐された』

え、優ちゃんが誘拐された？。

『あねさん冗談やめてよ』

『……事実トイレに行ったのに遅かったから見に行ったら優子のハンカチが落ちてた』

『あねさん、優ちゃんは俺があげたブレスレット持ってる？』

『……持ってる』

『そうか、あねさん心配しないで俺が助けるから』

『……なるべく早く』

『わかった』

俺は電話を切る。

『面白いことしてくれるじゃないか』

俺はバイクを走らせる優ちゃんが居る場所へ。

「SIDE 優子」

（ん、あれ？アタシ寝てたっけ？）

「ん、おい木下が起きたぞ」

「そうかだが、根本と誘拐だけしろと言ってたな」

「気づかれなきゃいいんだろ？」

「そうだ、日頃の鬱憤たまってたんだ木下で解消しようぜ」

「いいね」

（この状況で解消なんて一つしかないわよね、やだ、初めては映司
って決めてるのに）

「ん〜」

「うるさいぞ木下」

「いいさ、さつさとやろうぜ」

（やだ、助けて映司！）

ドオオオン！

「なんだ！？」

「ドアから！？」

（なに？今の音？）

ドオオオン！また音が鳴ると今度は壁を突き破ってバイクが出てき
た。

「誰だ！？」

「……」

男の人は無言で男子生徒に近づいて殴る。

「何しやがる」

男子生徒が反撃に出るけど返り討ちにされた。

「大丈夫か？」

アタシの縄とガムテープをとって聞いてくる、ヘルメットしてて顔
が見えないけど声が優しそうなトーンだった、アタシはさっきの光
景が怖かったのでその人に抱きついて泣く。

「もう大丈夫だ、大丈夫だから」

アタシの頭を撫でながら抱きしめてくれる。

（温かい）

男の人の体温がアタシに伝わってくる。

（寝ちゃいそう）

そう考えてるとまぶたがだんだん重くなつてく。

（いいよね？寝ちゃても）

そしてアタシは、眠りに付いた最後に『怖い思いさせちゃてごめんね、優ちゃん』って聞こえたけど気のせいね。

（SIDE 映司）

『寝ちやつたか4年ぶりだけどさらに可愛くなってるな、綺麗だよ優ちゃん』

俺はヘルメットを外しバイクをベンダーモードの状態にする、そして携帯で警察を呼び、寝ちやつた優ちゃんをおんぶして歩きだす。

『根本、優ちゃんを泣かした罪は重いぞ』

俺は復讐を誓つて優ちゃんの家に歩き出す。

『まずあねさん達に電話して安心させないとな、その後Bクラスを潰す誰が邪魔して来ようが潰してやる』

どうやって復讐するか考えてると秀が家の前に居た。

「映司！姉上は無事かのう！？」

『ああ、大丈夫だ、怪我もしてないし襲われてもいない』

「よかったのじゃ、わしも脅されてなにもできなかったじゃ」

『秀、Fクラスの情報言つたか？』

「言つておらんのじゃ、映司が助けてくれると信じてたからのう」

『そうか、明日攻撃を仕掛けるんだらう？』

「う、うむ（な、何じゃこの殺気は！？）」

『一つ言つておく、明日の俺は手加減できないFクラスも巻き込むだから逃げる』

「え、映司、わかつたのじゃ（い、いつも優しい映司がマジギレしておる）」

『早く開けてくれ、優ちゃんをベッドに寝かせたい』

「りよ、了解じゃ」

『邪魔する』

俺は優ちゃんの部屋に行き、優ちゃんをベッドに寝かす。

『優ちゃん大好きだ』

優ちゃんの頬にキスして部屋から出る。

（根本、よくも俺の大事な人を傷つけたな殺す）

『秀、明日な』

「う、うむ（こんなに切れてる映司見るの初めてじゃ）」

俺は、家に帰り、ご飯を食べ、お風呂に入り、寝る。

第3話俺と優子と誘拐！？（後書き）

短いです。

第4話俺と敗者と絶望がお前のゴールだ（前書き）

巧です、今回はひたすら明久達が映司に怯えます（笑）では第4話
どーぞ。

第4話俺と敗者と絶望がお前のゴールだ

「ん、早いな映司」

『そう?』

「あ、ああ、普通ならもうちょっと遅いだろ（な、なんだこの殺気、映司が切れてる!?!）」

「どうしたの雄二? あ、映司おはよう」

『ああ、おはよう明久』

「ゆ、雄二（映司からくる殺気が怖いよ）」

「あ、明久（そんなこと分かってる映司がここまで切れたところ見たことがない）」

「……何やってるんだ? 二人とも映司おはよう」

『康太おはよう』

「……え、映司（なんだこの殺気!?!）」

『なに?』

「……なんでお前そんなに切れてるんだ?」

『なに言ってるんの康太、俺怒ってないよ? そうだ雄二、この後攻撃に出るんでしょ?』

「あ、ああ、そうだが?」

『みんなを近づくせないでね?』

「ど、どうしてだ?」

『もし近づくなら味方ともども殺っちゃうよ?』

「わ、分かった（すごい声に殺気が籠められてる）」

「入るぞ」

「鉄人かどうした?」

「その名で呼ぶな、まあいい鴻上テストの点だ（すごい殺気だ俺が怯えてるだ!?!）」

『え、テストの点もう出たんですか?』

「ああ、お前化け物か?」

『ひどいじゃないですか化け物じゃないですよ』

「じゃどうやってたら一教科5万点出るのか教えてくれ」

「……5万!?」

『努力すれば誰でもできる』

「……無理だ」

『そんなことはどうでもいい、さあ〜って高橋先生を呼ぼうかな』

「居ますよ」

「……いつの間に!?!」

『じゃあ先生Bクラスを潰しに行きますよ?』

「分かりました」

俺は高橋先生を連れてBクラスに行く。途中秀にあった。

『あ、秀、優ちゃん大丈夫だった?』

「う、うむ昨日の事がなかったように落ち着いておる」

『そうか、よかった、じゃあBクラス潰してくる』

俺は秀と別れてBクラスに向かう。

『先生Fクラス鴻上映司がBクラス代表を含めた全員に総合科目で
試召戦争仕掛けます、サモン』

「……サモン」

Fクラス鴻上映司 VS Bクラス全員

総合科目 25000点 ×45人合計 90000点

「……な、なんだ(な、なによ)その点数!?!」

『一気に終わらせる、うおおおお!!』

Fクラス鴻上映司 VS Bクラス全員

WIN DEAD

「な、本当に一人で勝ちやがった」

いつの間にか来ていた雄二達が驚いてる。

「すごい」

「……強い」

「鴻上すごいわね」

「すごいです鴻上君」

『根本！お前だけは許さねえ！』

「落ち着け映司」

雄二が俺を羽交い絞めにしてるがそんな事関係ねえ。

『離せ雄二！あいつを殺さねえと俺の気が済まねえ！』

「お前になにがあつたんだ？明久、鉄人を呼べ」

「分かった」

『根本！殺してやる！』

「ひっ」

「ムツッリーニ、映司を抑えるの手伝え」

「……分かった今の映司なら本当に殺しかねない」

『離せ！殺してやる！殺す！』

「呼んできたよ雄二！」

「どうしたんだ鴻上！？」

「いいからこいつ気絶さしてくれ」

「分かった、フン！」

『がは』

俺は鉄人に腹を殴られ意識を手放した。

（SIDE 吉井）

僕は気絶した映司を見ながら考える。

「ねえ、雄二なんで映司本気で切れてたのかな？」

「知らんだが根本！お前映司が切れてる理由を知ってるだろう？」

「は、なんの事だかわからんな」

「映司切れてる理由はわし知ってるのじゃ」

「本当か秀吉！？」

「うむ昨日姉上が誘拐されたのじゃ」

「誘拐！？それで木下姉は無事なのか！？」

「映司が助けたのじゃ、指一本触れさせなかったのじゃ」

「そうか、それで映司がこんなに切れてたのか」

「映司は姉上の事が好きじゃからの」

「ひどいね」

「サイテー」

「ひどすぎます」

びく。

「雄二まずいよ、映司が起きる！」

「もつかよ、どんだけ回復力あるんだ!？」

『う、ん…俺はいつたい?』

（SIDE 映司）

体が痛い。

『俺は、なにを?』

『頭が冷えたか映司?』

『すまん、迷惑掛けたな』

『いいさ、そんな事されれば誰でも切れる』

『そうだよ』

『そうよ、謝る事ないわよ』

『そうで、好きな人にそんな事されれば殺したくもなります』

『そうか、ありがとうな』

「Bクラスの諸君、Bクラスの設備を奪わない代わりに根本を女装させ、Aクラスに行かせ戦争の準備があると言わせることに異論はないか?」

「「「「「ない!」」」」」

「「「「「そんな最低な奴煮るなり焼くなり好きにして!」」」」」

『雄二、根本に最後に言いたいことがあるんだが』

「奇遇だな、俺もだ」

「『根本!絶望がお前のゴールだ!』」

「じゃあ、明久着替えよう」

『優ちゃんに謝れ土下座でな』

言いたい事を言えて、すつきり、ぴりりりり。

『ん、電話?はい、もしもし』

『隊長ヤミーが出ました』

『すぐに行く時間稼げ』

『了解』

俺は、走って外に置いてある自販機にセルメダルを入れ、バイクに
乗る。

『くそ、こんな時に』

俺は、アクセルの全開に走る。あれは、カマキリのヤミィか。

「隊長！」

『分かってる、変身！』

『パカ』

『さあ稼ぎますか』

俺は、バースバスターをセルバーストモードにする。

『セルバースト』

『吹っ飛べ』

俺は、トリガーを引く。

ドオオオン。

『じゃあ俺帰るから後よろしく』

変身を解除しバイクに乗る。

ぴりりりり。

『また電話かよ、はい、もしもし』

『映司、約束の買い物、今日じゃなきゃ間に合わんぞ?』

『すぐ迎えに行くから』

『じゃあ門で待っておるぞ』

電話を切りバイクを走らせる。

「映司、遅いぞ」

『ごめん、乗って』

「うむ」

俺は秀にヘルメットを渡し乗せる。

『しっかり捕まっとけよ』

「了解じゃ」

俺はバイクのアクセルを回す。

「風が気持ちいいのじゃ」

『そうだろ』

俺は速度を上げる、そして俺はある場所でバイクを止める。

『ここでいいかな?』

『いいんじゃないかのう』

『じゃあ行きますか』

『うむ』

そして秀と一緒にある物を買った。

『喜んでくれるかな?』

『大丈夫じゃ』

『帰るか秀』

『うむ』

バイクに乗り家に帰る。

『じゃあ明日じゃ映司』

『おう、明日な秀』

俺は、明日の事を考えながら眠りに付いた。

第5話泣き落としと鼻血と水の泡（前書き）

巧です今回やっと主人公の装備が出ます。

そして今回主人公が鼻血を大量に流します（笑）でわ第5話どーぞ。

第5話泣き落としと鼻血と水の泡

「ここまで来たのはお前らのおかげだ」

「雄二がお礼を言うなんて珍しいね」

『雨でも降るんじゃないか？』

「ひどい言いようだが、これが俺の本心だここまで来れたのはみんなのおかげだ」

「そうだ、俺達はただのバカじゃないんだ！」

「バカなりに俺たちはすごいんだ！」

「Aクラス戦では一騎討ちで行きたいと思う」

「戦うのは誰だ？」

「もちろん俺と翔子だ！」

「バカの雄二が勝てるわけっ！」

カッター投げたぞ、こいつらほんとに友達だろうつか？。

「次は耳だ」

本気だぞこいつ。

「まあ、明久の言った通り普通では勝てないだからフィールドの限定をする」

フィールドの限定？ああ、あの問題か。

「その問題とは『大化の改新、お前があねさんに間違えて教えた答えを利用する気か？』知ってたのか映司」

『知ってるに決まってるんだろあねさんに何回も間違えてるって教えたと思ってるんだ？』

「何回も教えた？直さなかったのか翔子は？」

『ああ、あねさん言ってたよ』これは雄二が教えてくれた、だから間違ってもずっと覚えてるって『いや、愛されてるね雄二』

「ん？映司、愛されてるってどういう意味？」

『ああ、そっぴやあねさんに同姓が好きとかあったな、あれは全部根も葉もない噂、本当は雄二の事を一途に思ってるだけだよ』

「「「「はあああああ!?!」「」「」」

「そうなんですか!?!」

「そうだったんだ」

「と、とにかくこれで勝てる!//」

『顔真つ赤だよ、雄二くゝん』

「う、うるせえ//」

『雄二最後に頼みがあるんだけど』

「どうした?」

『そろそろ、あねさんの気持ちに応えてあげてくれないか?』

「……………」

『あねさんが最近おかしいんだ、なんでも夜になると自分を攻めてるって何度も何度も案の事がなければって泣くらしいんだ』

「……………」

『あまりにもおかしいんで病院に連れてったら先生に精神が壊れかけてるって言われたんだ、雄二、お前のせいであねさんがおかしくなったら俺はお前を許さないたえ何処に逃げてもお前を殺してやる!』

「……………ちょっと一人にしてくれ」

『ああ』

雄二が外に出る。

『ふう、演技って疲れるな』

「なぬ、今の全部演技だったのかのう!」

『当然だ、あねさんの太い精神なめるなよ、素直にならない雄二の後押しだよ』

「気づかなかったのじゃ、演技部に入らぬか?」

『別に入ってもいいがライトベンダーで忙しいし無理だな』

「……………みんな行くぞ」

雄二が入ってきて俺達を先導する、さあ、どうなるかな?。

「一騎討ち?」

「ああ、一騎討ちで勝負だ」

優ちゃん可愛いよ。

「ん〜なにが狙いの？」

「もちろんFクラスの勝ちだ」

バカ、そんな事言ったら拒否るだろそして悩んでる優ちゃんも可愛いよ。

「拒否ね」

「なぜだ？」

「そんなにリスクが高いことはしないわよ姫路さんが出るかもしれないしね」

「じゃあBクラスと戦う気はあるのか？」

「Bクラスってあの」

「そうだ、あれがやってるクラスだ」

「あの代表になにしたの？」

「？、特になにもしてないが？」

「じゃああの代表なんでアタシの土下座してったのかしら？」

「ああ、Fクラスにそういう卑怯な奴が大っ嫌いな奴がいてな殺気全開で土下座しろって言ってた」

「そうなの？どなたかしら？」

「こいつだ」

雄二そんなことしたら俺の正体がばれちゃうじゃないか！。

「そう、ありがとうアタシの為に怒ってくれて」

『気にしないでくれ』

「ん〜ねえアタシ達どつかで会った事がない？声も聞き覚えあるし、顔も見覚えあるんだけど？」

『気のせいだ、他人の空似だ』

「ん〜？しかもごく最近聞いたような？」

『いいから交渉を続けてくれ』

「待つて、そうだバイク持つてる？」

『バイク？持つてるがそれがどうした？』

「思い出したアタシを助けてくれた人だ」

『ばれたか』

「でもあの時顔見えてなかったのに、どうして見覚えがあるのかしら?」

『知らない』

「木下姉、翔子と交渉した結果5対5で勝負だそうだ」

「代表が決めたならそうしましょ」

『（助かったよ雄二）』

「（気にするな）」

「さっそく始めます最初は誰が行きますか?」

「アタシよ」

「わしが行こう」

「そうだ秀吉Cクラスの小山さんって知ってる?」

「うむ?なんの話じゃ」

「まあ、いいやちよつと来てくれる?」

「逝こうかの」

秀が字が違うよ。

『あんたCクラスでなにしてくれたのかしら?なんでアタシが豚呼ばわりしてる事になってるのかな?』

『はははは、それはじゃな姉上の性格をわしなりに推測して…姉上その間接はそつちには曲がらな…』

ガラ。

「秀吉用事があつて帰っちゃったみたいだから次の人出してくれる?」

俺の婚約者は獵奇的です。

『俺が行こう』

「あらあなたが来るの?」

『ああ、自己紹介が遅れたな、俺の名前は佐藤浩二、得意科目は特になし、苦手科目は保健体育だ』

「あら?そんな事言つていいのかしら?」

『ああ、保健体育は選べないからな』

「？、なぜかしら？」

『保健体育の点数は0だからだ』

しーーーーん。

「その話本当なの？」

『ああ、本当だ、なんならテストの点を見せよう』

「そうだ佐藤君学園長からの伝言です」

『？、なんですか？』

「召喚獣のメンテナンスが終わったそうです」

『ラッキー、今の召喚獣使いにくかったんだよな』

「じゃあ総合科目でお願いします」

「承認します」

「サモン！」

『サモン！』

Aクラス 木下優子 VS Fクラス 佐藤浩二

総合科目 3890点 250000点

あ、学園長が空気呼んで名前変えてくれてる。

「な、なによ！その点数！？」

『俺の全力だが？』

「ありえないでしょ！？」

『努力すれば誰でもできる』

「「「無理だ！」「」「」」

『まあいいさ、完全同調！』

キーワードを言った瞬間俺の体は倒れ、召喚獣に意識が入る。

「ちょ、大丈夫！？」

なにも問題ない

「「「へ、」「」「」」

どうかしたか？

「「「「「しよ、召喚獣が喋ってる！？」「」「」」

「当然さね」

Aクラスのモニターに学園長の姿が映し出される。

学園長お久しぶりです

「久しぶりだね空気呼んで名前変えてやったんだから感謝しな」
分かってますよ

「名前変えたってどういうことですか？」

「言葉の通りさね」

『さつさと始めようぜ、変身！』

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！』

俺は変身し優ちゃんをゆっくり見る、そこには下着姿の優ちゃ。

『ブフウー！ー！』

俺は、鼻血を生きよいよく出した。

「ははははは、やっぱりあんた面白いよ、ははは」

学園長！図つたな！

「ははは、あんたの年だったらラッキーで済ませるだろうに」

「え、なにがあつたんですか？」

「なに召喚獣の目の感度を上げて服が透けるようにしただけさね」

「な！／＼／」

言つたー！俺が包み隠そうとした事を言つたー！

「素晴らしい！」

画面が変わり俺の父さんが映る。

「おじ様！？」

「ん？優子さん、何度も言うようにお義父さんと呼んでくれ！」

「え／＼／はい、お義父さんどうかしたんですか？」

「なに、息子のお嫁さんの晴れ姿を見たかつたからな」

「へ？でも映司まだ帰ってきてないんじゃないか？」

「ん？何を言ってるんだ？優子さんの旦那さんならそこに鼻血を出して倒れてるじゃないか！」

「へ、」

『父さん！空気呼んでよ！俺と秀が練った計画が水の泡じゃないか！』

鼻血を止めるために腕輪の力を解除していた俺が叫ぶ。

「映司〜？」

『あはははは、優ちゃんいい笑顔だよ』

「アタシを騙したわね！」

『ごめんなさい！』

「ちよつとアタシとO H A N A S H Iしよ？」

『やだよ！今の優ちゃんだったら殺されるよ！？』

「今回は許してあげる、アタシとの約束守ったみたいだし」

『約束？ああ、生きて帰ってくるってやつか』

「お帰り、映司」

と言いながら抱きついてくる優ちゃんを俺は抱きしめる。

『ただいま、優ちゃん』

「やっぱり処刑しよう」

「感動の再会ですね」

「憧れるよね〜」

「姉上うれしそうじゃ」

「……映司おめでとう」

「あの〜初めてほしいんですけど」

『ん、ああ、俺の負けでいい』

「へ、しょ、勝者Aクラス」

Fクラスの方に帰ろうと思ったんだけど殺気立っているのでAクラスの方にお邪魔させてもらったその間ずっと優ちゃんが抱きついてたのは言うまでもない。

第5話泣き落としと鼻血と水の泡（後書き）

鼻血です（笑）。

第6話 二代目と復活と俺は仮面ライダーオーズだ！（前書き）

巧です、今回主人公が死にます（笑）

第6話 二代目と復活と俺は仮面ライダーオーズだ！

「ん〜この抱き心地久々」

『優ちゃん、みんな見てるから／＼／』

「映司は嫌？」

『う……負けました』

『ウホウホ』

「？、何これ？」

『ん？ごりちゃんなんでそんなに興奮してるんだ？、！、まさかヤミーか！？違うなヤミーだとこんなに興奮しない』

（何だ？なんでこんなに興奮してるんだ？、！、そうか）

『高橋先生！試召戦争を中止してください！父さん！第1小隊、第2小隊、第3小隊を学園の周りに配置して装備はSランクで！ついでに里中さんにメダジャリバーを持ってこさせて！』

「Sランク！？」

『早く！』

「すぐに行かせる」

『くそ、まさかグリードが入り込んでいるとは思わなかった、変身

！』

『パカ』

『何処だ？何処にいる？』

あたりを見回す。

『ん？お前か！水野真理奈！いや、メズール！』

「あら、よくわかったわね」

『なぜ此処に居る？』

「この学園には欲望が渦巻いてる、セルメダルが大量に手に入るわ」

『ピラニアヤミーの親は誰だ！？』

「あら、分らないの？あなたの一番大切な人の欲望よ」

『まさか優ちゃんの欲望か！』

「うふふふ、欲望から作られたヤミーを倒するのが仕事なのにこの欲望はあなたが生んだのよ？」

『黙れ！お前だけは許さない！』

「あら、バースだけで私を止められるかしら？」

『たとえオーズが居なくても俺がみんなを守る！』

『パカ、ドリルアーム』

『喰らえ！』

「あら、攻撃が単純すぎるわ」

『がは、この野郎！』

「どうしたのかしら？バースの坊やいつもはあんなに強いのに」

『くそ』

「はあ！」

『ぐ』

「さすがのあなたでも大切な人を殺されるのは辛いでしょうね？はあ！」

メズールが優ちゃんに向かって攻撃する。

『優ちゃん！』

そして俺はその攻撃の間に入る。

『グアアアア！』

変身が強制解除され俺は重力に従って床に倒れた。

「映司！嫌、嫌あああ！」

『がはあ、優ちゃん怪我は…無い？』

「映司喋るな！」

『明久、これを頼む』

「バースドライバー、分かったからもう喋るな」

『俺の守りたい物を任したぞ』

そして俺はこの世を去った。

（SIDE 優子）

（映司が死んだ？信じないどうせアタシを騙そうとしてるのよそうでしょ映司）

「映司…嘘って言うてよ死んだふりしてるだけなんでしょ？映司…えいじ…えい…じ…え…い…じ」

「貴様だけは許さない！、変身！」

『パカ』

「雄二、木下さんを見ておいて」

「分かった、死ぬなよ明久」

「うん、うおおおお！よくも映司を！」

「世界は弱肉強食なのよ弱い奴が死ぬのは当たり前」

「映司は弱くない！」

（信じたくない、映司は死んでない、アタシは信じないだから早く起きてよ…映司）

「SIDE???」

（ここは何処だ？）

目の前にヴジョンが出る。

（あれは俺？だけど背が俺より高い、もう一人は誰だ？）

そして完全体のグリードが出てくる。

（な、なんで完全体何だ！？よく見たら此処は日本じゃない、まさか此処は800年前の封印の地、あれは800年前の俺？ん？よく見たら隣に居るのは優ちゃん？まさかご先祖様！？あ！変身した、強い完全体のグリードをあつという間に倒した、え？こっちに来る）

（生きたいか？）

（え？ああ、生きたい、欲望の王オーズよ俺の生きたいという欲望を叶えろ！）

（よかろう、なにせ唯一オーズの力を暴走させずに使える貴重な人材だこんなところで死なすわけにはいかん、さあ行け！生きろ！お前にはその資格がある）

（ああ、いいおこないをしてきたつもりだからな、まだやり残したこともある、生きてやるさ）

そして周りが光に包まれた。

（行きましたか？）

（ああ、俺の生まれ変わりだそうそう死なんさ）

（あら、それを言うなら私だって生まれ変わりなんですよ）

（そうだったな行くか？優子）

（はい、映司）

（SIDE 映司）

俺がゆっくり目を開けると、飛び込んできたのが優ちゃんの泣き顔だった。

「映司起きてよ」

『優ちゃん』

「！、映司！」

優ちゃんが抱きついてきたので俺は受け止める。

「映司！映司！」

『心配かけたな安心してもう大丈夫だ』

「そんな馬鹿な確実に心臓は止まったはずなのに！？」

『ありがとうよメスール、おかげで800年前の記憶を呼び覚ますことができたぜ』

「800年前ですって！？」

『優ちゃんちよつと離れてろ、明久！御勤めごころつ、もういいぞここからは俺がやる』

そして俺は懷から石板を取り出す。

「な！それは封印の！？」

『みんな見てろこれが800年前の戦士の姿だ！変身！』

お腹に付けると元の姿に戻り、メダルを入れ、オースキヤナーでスキャンする。

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！』

「オーズ！」

『違うな、俺は仮面ライダーオーズだ！お前の欲望俺が貰う！』

「く！分が悪いわね」

『おらおら！、どうしたさっきまでの威勢の良さは！』

「しょうがない逃げるわ！」

『あ！こら！逃げんな！はあゝ逃げられたか、まあいい次はヤミーだピラニアだったから多いなじゃあメダルを入れ替えてっ』

『クワガタ！カマキリ！バッタ！ガゝタガタガタキリバッ！ガタキリバッ！』

「歌が違うな」

「色が緑になった！」

『うおおおおおお！』

「きゃ！」

「すごい威圧感だ」

『行くぞ！』

「え！分身した！？」

『うりゃ！ せい！ うおりゃ！ 一つになるってあり！？』

ピラニアが一つになり攻撃してくる。

『あぶっねえ、これで決める！』

『スキヤニングチャージ！』

『うおおお！、せいやああああ！』

どおおおん！

『うお、大量！1000枚はあるな』

俺は変身を解除する。

「映司！」

そして優ちゃんが飛び込んでくる。

『へ？うわぁ！優ちゃん／＼／』

「映司！映司！」

『ごめんね優ちゃん心配かけて、優ちゃんのウェディングドレス見たさで戻ってきたよ』

「ふえっ／＼／」

『ん？どうかした？』

「ねえ雄二、映司って？」

「ん？ああ、言葉の意味分からずに言ってるな」

『ああ、そつだ明久今日からお前をライトベンドー第一小隊副隊長

に任命する！」

「へ？なにそれ？」

『ヤミーと戦うための組織だ、ちなみに給料制で隊長俺だから』

「今思っただが試召戦争どうなるんだ？」

『普通に考えて中止でしょ』

「映司、姉上にこの前買った物渡さなくてよいのか？」

『ええ！此処で！？さすがに恥ずかしいよ／＼／』

「？、買った物って？」

「おい映司お前何か面白いネタ隠してないか？」

『あははは、無いよ、しいて言うならあねさんと雄二の婚約指輪持つてただだよ』

「おい！それ渡せ！将来にかかわりそうだ！」

『教室での話聞いてなかったの？雄二君？』

「とりあえず！それを渡せ！」

『自分で渡すの？』

「そうだ！ってあれ？」

『雄二、大胆だね』

「……雄二嬉しい」

「違っぞ翔子」

『雄二』

「なんだ！？」

『ピっ』自分で渡すの？』『そうだ！』『』

『つと言ったものがとれたんだけど？』

「それも渡せ！」

「それよりも映司渡さなくていいのかう？」

『え！それは、とりあえずあねさんこれが婚約指輪でこれがボイスレコーダーね』

「……ありがとう映司」

「とりあえずじゃなくてじゃな渡さなくていいのかう？」

『うっ／＼分かったよ渡すよ／＼／』

「それでこそ映司じゃ」

「え？なんの話？」

俺は懷から箱を取り出す。

『優ちゃん目をつぶって左手出して／／／』

「へ？うん」

言われた通り目をつぶって左手を出す優ちゃん。

（落ちて落ち着け俺）

箱から指輪を出して左手の薬指に付ける。

『優ちゃんもう開けていいよ／／／』

「うん、映司これって!？」

『木下優子さん卒業したら俺と結婚してください／／／』

「は、はい、喜んで／／／」

「これで義兄上と呼べるのう」

「……おめでとう優子」

「木下さん可愛いです」

「いいな」

「「「「もう我慢ならねえ！殺せ！」「「「「

「「「「「そうはさせないわ！木下さんにえつと」「「「「「

『鴻上だ鴻上映司』

「「「「「鴻上君！奥さん連れて逃げて！」「「「「「

『ありがとうみんな行くぞ優ちゃん』

「うん！」

俺は優ちゃんをお姫様抱っこをして窓から飛び降りる。

『とう！』

ドン！

『優ちゃんとりあえず挨拶に行こう』

「うん、映司それと優子って呼んで／／／」

『え／／／うん、行くよ優子／／／』

「映司となら何処までも」

俺は優子の家に走った。

第6話 二代目と復活と俺は仮面ライダーオーズだ！（後書き）

書いてる途中に思いましたAクラスどんだけ広いんだよ！って（笑）。

第7話挨拶とデートと約束（前書き）

巧です。今回バトルはありません（笑）。

第7話挨拶とデートと約束

『お久しぶりです』

「本当に久しぶりだな映司君」

「いい男になっちゃって、今日はどうしたのかしら？まるで優子にプロポーズしてOK貰って挨拶しに来たって感じよ？」

「『！／／／』」

「あらあら、図星見たいね」

「お母さん当てないでよ！／／／」

『娘さんを僕にください／／／』

「どうします？あなた？私はもちろんOKだけど」

「ん、大丈夫だ、俺もOKだ優子をよろしく頼む映司君」

『ありがとうございます』

「映司これからよろしくね／／／」

『うん、こちらこそよろしく／／／』

「青春ね」

「そうだ、母さん耳貸してくれ」

「ん？なにあなた……分かったわ」

「『？』」

「映司君」

『？』

「優子とデートしてきなさい」

『へ／／／』

「え、うん映司行こ」

『ちよっ！／／／』

「ほら行くよ」

『分かった／／／』

「バイクで行こう」

『何処行きたい？』

「映画見に行こう?」

『いいよしっかり掴まってね』

「うん」

そして俺は映画館に向かってバイクを走らせる。

SIDE 吉井

(不幸だよ映司には逃げられるしおまけに)

「ねえねえアキ何見る?」

「吉井君この映画なんてどうですか?」

「うん、そうだね二人で見てもいいよ」

「えゝ!なんでよ(ですか)!」

「じゃあアニメにする?」

「そうじゃなくてゝ!」

「観念するんだな明久」

「雄二!」

「男とは…無力だ…」

そこには両手に手枷をした雄二と霧島さんが立っていた。

「……雄二何見たい?」

「早く自由になりたい」

「……じゃあ『地獄の黙示録完全版』」

「おい!それ3時間23分もあるぞ!」

「……2回見る」

「一日の授業より長いじゃなえか!」

「……雄二と会えない分のう・め・あ・わ・せ、／／／」

「やっぱ、帰る!」

「……今日は逃がさない」

「おい翔子それスタンガン!」

バリバリバリ!。

「……学生2枚2回分」

「はい♪学生1枚、気を失った学生1枚、無駄に2回分ですね♪」

今の現状スルーなの!?!此処の映画館はおかしいよ!?!。

「中の良いカップルですね」

「憧れるよね」

「……（目が腐ってるんじゃないかな）」

「あねさん、埋め合わせの仕方間違えてるよ」

「代表スタンガンなんて持つてるんだあれが普通なの？映司」

「普通なわけがない」

後ろから声が聞こえて振り向いたら腕を組んだ映司と木下さんが立っていた二人の指にちゃんと婚約指輪がはまっている。

「映司も見に来たの？」

「ん、ああ、優子の両親に挨拶に行ったらあつさりOK貰えてなんかいきなりデートしてきなさいって言われてな映画が見たいって優子が言うからな」

「うらやましいな」映司、美人な木下さんをお嫁さんに来て

「お前だつて両手に花じゃないか良い御身分だな」

「僕的には可愛い子に変わっただけのかつあげなんだけど」

「お前そんなに金ないのかどんだけ使ってたんだよ」

「しょうがないじゃないか毎月面白いゲームが出るんだよ映司みたいに家がお金持ちじゃないし」

「はあよく勘違いされるんだが小遣いは普通なんだぞ」

「え！そうなの！？」

「俺の場合趣味が無いしライトベンダーは給料が出るからな懐は温かいんだそうだ明久今日メズールとお前戦ったから特別に報酬やるよ3万程度でいいか？」

「え！ほんと！？」

「ほれ、楽しんで来い」

「ありがとう映司」

「優子見たい物決まったか？」

「え！うん、これ」

「了解、学生2枚で」

「はい、お似合いカップルの学生2枚ですね」

『行くぞ優子』

「うん！」

木下さんはまた映司と腕を組んで劇場に向かった。

「中のいい夫婦ですね」

「優子幸せそう」

「なんだろう姫路さんと美波は映司と木下さんを見ていたら攻撃力が0になる気がする」

この後映司から貰ったお金使ったので食費は減らなかった。

～SIDE 映司～

俺の好きな夕日が見える丘で優子と話している。

『面白かったね優子…優子？』

「ねえ映司、アタシ達結婚するんだよね」

『どうした？優子』

「今日は生き返ったけどまた死んじゃうんじゃないかって思って、映司死なないで」

『大丈夫だ俺は死なない絶対に生きてお前を幸せにしてやる』

「約束だよ…」

『ああ、約束だ』

そして俺は泣いている優子を抱きしめる。

「映司…」

『優子』

俺は優子の顔に自分の顔を近ずける優子もその意味がわかったように目をつぶる。

『愛してる優子／＼／』

「んっ、アタシも愛してる／＼／」

俺は決めた絶対にグリード達を倒して優子の元に生きて帰る事を。

『じゃあ帰ろうか？／＼／』

「うん／＼／」

ぴりりりり。

『ん？電話だ、はい、もしもし』

『義兄上』

『秀？どうした？』

『そろそろ帰ってくるかの？』

『ん？ああ、今から帰ろうと思ってたんだけど』

『じゃあわしの家に姉上と一緒に帰ってくるんじゃない？』

『？よくわからないけど了解』

『秀吉なんだって？』

『よくわからんが優子と一緒に帰ってこいだと』

『？まあいいわ行きましょ』

『了解、乗って』

『うん』

俺は優子をバイクに乗せて優子の家に向かって走る。

「そう言えばお母さんなんできなりデートしてきなさいって言ったのかしら？」

『家にかえるとなにかあるな』

『まあいいか』

『そうだな』

そして優子の家に着いたのでバイクを止める。

「『ただいま！』」

「あら、お帰りなさい」

「お帰りなのじゃ」

『秀、聞きたい事があるんだけど』

「なんじゃ？」

『FFF団どうなってた？』

「殺気立っていたのじゃ」

『はあ、やっぱりか』

「そつえばなんで映司が呼ばれたの？」

「父上と母上がパティーやるとか言ってたのじゃ」

「『パティー？なぜ？』」

「あらあら息ピツタシね」

「いいからさつさと座りなさい」
『はい』

「（秀吉例の作戦は？）」

「（完璧なのじゃ父上）」

『（ん～～）』

「うん？どうしたの映司？」

『いや、なにか悪寒が』

「？」

「えゝ娘の優子の嫁入りを祝して」

「『乾杯！』」

ごく。

（ん？なにか苦味が？普通の麦茶のはずなのに）

（ん？なんか苦いわね？）

（うふふ、飲んだわね）

（飲んだの）

（作戦始動）

「ねえ映司？」

『どうかしたか？』

「この麦茶苦くない？」

『優子も苦いと思ったか俺もなんだ』

「？なんで苦いのかしら？」

『さあ？』

「何を話してるんじゃ？（まさか麦茶にお酒が入ってるとは思わないじゃろ）」

『いや気にしないでくれ』

「ほら食べて食べて（うふふ、名付けてお酒の力を借りて一線を越えちゃおう大作戦）」

「『いただきます』」

『これおいしいです』

「そうだろう家内の料理はなんでもうまいからな（お酒は意識が残

る程度に入れたから記憶には残るな」

「まああなただったら」

「本当の事だろ？」

「父上と母上は今でも熱いの（そろそろ効いてくるじゃろ）」

「本当ね／＼／」

『どうした優子顔赤いぞ／＼／』

「それを言う映司だって顔赤いよ／＼／」

『え！本当か！？／＼／』

「あれ？映司いつの間に分身の術覚えたの？／＼／」

『そう言う優子だつて3人いるぞ／＼／』

「映司よ姉上が変なので部屋に連れてつてくれないかのう？」

『んゝ了解しましたボス／＼／』

「了解了解／＼／」

『行くぞ優子／＼／』

「ひゃあ／＼／」

「（なぜお姫様抱っこ？しかも姉上も義兄上もお酒が弱いのが）」

「（これはうまくいきそうね）」

「（二人には秘密だが媚薬も入れといたからな）」

『んゝ周りが回ってるゝ／＼／』

「あは♪映司が5人に増えたゝ／＼／」

「父上、母上なんか心配になってきたのじゃ」

「一回水を飲ませましょうか」

「俺もそうした方がいいと思う」

「映司さん、優子お水飲んで」

『はい／＼／』

「うん／＼／」

俺は渡された水を飲み干す。

『行くぞ優子／＼／』

「うん／＼／」

そして俺は階段を上り優子の部屋に入り優子をベッドに寝かせる。

『ほいつと／＼／』

「ありがとう／＼／」

（んんゝなんか優子の顔が赤くってなんかこう色っぽいな）

『優子／＼／』

「映司／＼／」

俺は顔を近づけてキスをする。

「（うまくいったの）」

「（ほら行きますよ）」

「（聞いちゃまずいからな）」

「ん、映司／＼／」

『優子／＼／』

俺はもう一回キスをするだが普通のじゃないディープの方だ。

「ん！ふあ…はあ…ちゅ…くちゅ…」

俺はいったん顔を遠ざけると俺の口と優子の口の間に透明な糸が出来ていた。

『優子、俺／＼／』

「いいよ、映司なら／＼／」

そして俺達は体を重ねた。

第7話挨拶とデートと約束（後書き）

大丈夫だよね！？まだR15だよね！？

第8話灼熱コンボと封印されたままのメダルと同棲！？（前書き）

巧です前回の話ギリR15だね！？本当に大丈夫だね！？。
っと言っわけで（）どっいうわけかわからんけど（）第8話どっぞで。

第8話灼熱コンボと封印されたままのメダルと同棲！？

『ん…なんだ？頭が痛い』

むにゆ。

（ん？なんだこの力が入ってない二の腕のような柔らかさは）
むにゆ。

「ん…」

『へ？』

手を置いている場所を見るとなにも着ていない優子が寝ていた。

『ゆ、ゆ、優子？／／／』

そして俺もなにも着てなかった。

『なんで俺も裸なんだ？あ、そうだ昨日／／／』

カアー…つと顔が赤くなるのが分かる。

（俺にしては大胆なことしたな／／／）

『いったん自分の家に帰らないとな』

俺は優子を起こさないようにベッドから降り服を着直し部屋から出る。

「んむ？おはようなのじゃ義兄上」

『ああ、おはよう』

「昨日はお楽しみだったようじゃの（にやにや）」

『う…／／／（待てよ？なぜ秀は俺がいることに驚かない？ああ、そういうことかはめられたんだな俺と優子は）』

「この事がFFF団にばれたら大変じゃのう（にやにや）」

『ああ、俺、家に帰るな／／／』

「んむ、そうした方がよいじゃろ」

俺は玄関に行き靴をはき自分の家に入る。

『シャワー浴びよ／／／』

シャワーを浴び制服に着替え朝ごはんを食べて家を出ると優子が立っていた。

『優子おはよう／／／』

「うん、おはよう／／／」

（やばい顔が見れない／／／）

『どうした？／／／』

「映司ってバイクで行くんでしょ？どうせなら乗せてもらおうと思
つて／／／」

『そうかじゃあ乗って／／／』

「うん／／／」

バイクの後ろに優子を乗せると落ちないように抱きついてきた。

『い、行くよ／／／』

「う、うん／／／」

バイクを走らせる、学校までそんなにかからないけどヤミーの問題
でどうしてもバイクが必要なんだよねそうだこんど明久にバイクの
免許取らせないと。

「映司／／／」

『なに？／／／』

「その気持ちよかったよ／／／」

『！、そ、そうですか／／／』

（優子不意打ちは卑怯だよ／／／）

『着いたよ／／／』

「うん／／／」

『今日も頑張ろうね／／／』

「うん、頑張ろう（そうだ）ん、／／／」

『！（まさかキスしろと！？）ゆ、ゆ、優子！？キスしろと？／／
／』

「早く／／／」

『優子／／／』

「ん、ありがとう／／／」

『行ってくる／／／』

「行っってらしい／／／」

俺は優子別れてFクラスに向かう。

(いろいろな事がありすぎだよ／／／)

『おはよう／／／』

「ん？ああ、おはよう」

「映司おはよう」

「……映司なんで顔が赤い？」

『熱いだけ』

「おはようじゃ（にやにや）」

『秀なんでにやにやしてるのかな？』

「それはじゃな耳を貸すのじゃ」

『え、うん』

「（朝から学校でキスとはらぶらぶじゃな）」
ボン！。

『ひ、秀見てたのか！？／／／』

「見てたぞよ（にやにや）」

「ん？どうしたの映司？」

「……さっきより赤い」

「面白そうなネタ隠してそうだな」

『ないない！絶対に無い！』

「FFF団よ！映司が木下姉とデートしたそうだ！」

「「「「異端者には死の鉄槌を！」「」「」」」」

『それを言うなら明久だつて姫路と島田とデートしてたぞ雄二もだ！』

「バカそんな事言ったら僕まで巻き込まれるじゃないか！」

「俺の場合はデートじゃなくて拉致だ！」

「皆の衆落ち着くのじゃ義兄上はデートしてたのじゃがその後お楽しみだったようじゃ（にやにや）」

『うおい！爆弾投下すんなよ秀！』

「まさか否定しないだ！？」

「木下さんと一夜を共にしてたの！？」

「教えてください鴻上君！」
「ウチにも教えて勉強になるから」
「……H（ブシャアアアアア！）」
『覚えてろ秀！』
「「「「異端者には死の鉄槌を！」「」「」」
「教えてください鴻上くん！」
「待ちなさい鴻上！」
『くそ、殺されてたまるか！+教えてたまるか！』
「なぜですか！？教えてください！」
「そうよ教えなさいよ！」
『言えるか！そんな恥ずかしい事！』
「殺す殺す殺す！」
「コロスコロスコロス！」
『カタカナの方怖ええ！』
ぴりりり。
『こんな時に電話かよ！はい、もしもし』
『隊長ヤミーです』
『すぐ行く！』
ぴ。
『明久あ！ヤミーだ！』
「え！本当！？」
『行くぞ！』
「分かってるよ」
俺と明久は窓から飛び降り校門に走る。
『明久さっさと乗れ！』
「いいよ！」
『アクセル全開で行くぞ！』
バイクのアクセルを全開にしヤミーのところに向かう。
『この状態で変身した方がいいな』
「そうだね」

「『変身!』」

『パカ』

『タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ!タトバ!タ・ト・バ!』
あれはウヴァのヤミーか。

『行くぞ!明久!』

「おう!」

『お前の欲望!俺が貰う!』

「さあ稼ぎますか」

『他のコンボ試してみるか』

『ライオン!トラ!チーター!ラッタラッタ!ラトラータ!』

『うおおおお!』

「熱いよ映司!」

『すまんすまん』

「かつこいいねそのコンボ」

『そうだろうそれはそうと、一気に終わらす!』

「そうだね!」

『スキヤニングチャージ!』

『セルバースト』

『うおおおお、せいやああああ!』

「いつけえー!」

どおおおん、そして変身を解除する。

『はあはあ』

「映司大丈夫?なんかきつそうだけど」

『大丈夫だコンボを使うと大量に体力を使うただだ、みんなあとよろしく明久帰るぞ』

「う、うん」

『はあはあ、早く乗れ』

「分かってるよ」

そして俺はバイクを走らせる。

『（んん~~~~~!）』

「どうしたの映司？」

『いや、また悪寒が』

「？」

『（まさかまた秀が何か考えてるのか？）』

「ほら考えてないで学校に着いてるよ」

『ああ』

バイクから降りFクラスに向かう。

『（体がだるいコンボの反動か？）』

「映司大丈夫？」

『ああ、だいじょうぶ』

言い終わらないうちに俺は廊下に倒れた。

「ちょ、映司！？」

「義兄上！？どうしたのじゃ！？」

「いきなり倒れたんだ！」

『はあはあ（なんだ！？ガタキリバの時はこんなにきつくなかったのに）』

「義兄上！しっかりするのじゃ」

「保健室に運ぼう手伝って秀吉」

「了解じゃ」

『はあはあ（意識がだんだん遠のいてく）』

「映司！？どうしたんだ！？」

「雄二ちようどよかった運ぶの手伝って」

「分かった、早くした方がいいな」

『（苦しい、なんだ！？もう意識を保ってられない）』

そして俺は意識を手放した。

（SIDE 優子）

「（何か胸騒ぎがするわね）」

「どうしたの優子何か険しい顔して」

「うゝんなんだか胸騒ぎが」

「胸騒ぎ？仮面ライダー君のこと？」

「そうなのよって愛子！／／／」

「もう遅いよ優子、いいな僕も恋したいよ」

「……愛子は土屋が気になってるんじゃないの？」

「な！何言ってるの代表！僕は別にムツツリー二君のことなんて／／／」

「じゃあなんで顔が赤いのかしら？」

「優子まで／／／」

「……教えて愛子、土屋どう思ってるの？」

「だから僕は、（そうだ）それより優子の方が気になるな」

「ふえ！／／／」

「……確かに気になる」

「どうなの仮面ライダー君とは」

「そ、それは／／／、え、えへ」

「……笑顔じゃ騙されない」

「そうだよ優子どんな感じなの？」

「そ、その／／／」

「まさか『ピーー』でもしたの？」

「！／／／い、いやそんなことはないわよ？」

「……優子教えて」

「その反応だとしちゃったのかな？」

「そ、その／／／」

バン！。

「姉上！」

「秀吉？どうしたの？」

「義兄上が、義兄上が倒れたのじゃ！」

（映司が倒れた？朝あんなに元気だったのに？）。

「映司は今何処！？」

「保健室っじゃ、早くするのじゃ」

「すぐ行くわ」

アタシはAクラスを思わず飛び出し走り出す注意する声が聞こえた

けど今はどうでもいい。

（映司今行くからね）。

（SIDE 映司）

（また此処か）

俺が立っていた場所は800年前の封印の地だった。

（はぁ、また優子泣かしちゃうじゃないか、ん？よく見たら此処は封印の地じゃない！？）

少し待つとオーズの代わりにメダルが出てきた。

（なんだこのメダル！？恐竜！？そんなグリード居ないぞ！？こっちは爬虫類！？まさか封印されたままなのか！？）

（オーズよ）

（誰だ！？お前はご先祖様かよ）

（現代のオーズそのコアを封印から解けお前の力になってくれるだろう）

（なぜだ！？封印を解いたらグリードになってしまわないか！）

（封印を解けオーズ必ず力になってくれる）

（答えろなぜ解かなければならない！）

（封印を解けオーズ）

（答えろおおお！）

叫んだ瞬間周りが光に包まれ最後に（封印されてる場所は文月学園の校庭土の中だ）って聞こえた。

（SIDE 優子）

「映司起きて、約束したじゃない死なないってだから起きて映司」
アタシは映司の手を持ちながら泣く。

「映司……」
びく。

「！、映司？」

アタシは少し動いたので映司の顔を見る。

『行かなきゃ』

見ると映司は目が覚めてただけど目に光が無かった。

「映司？映司！何処行くのよ！？」

『呼んでる、コアメダルが俺を呼んでる』

（コアメダル？って確かあの怪物の体の中に入ってるってやつがなんで映司を？）

『行かなきゃ』

「映司！」

映司はベッドから起き上がり廊下を歩きだす。

「義兄上もう大丈夫なのかのう？義兄上？」

『行かなきゃ、コアメダルが俺を呼んでる』

「何を言っておるのじゃ義兄上！？」

「秀吉、坂本君と吉井君呼んできて」

「了解じゃ今の義兄上は何かおかしいからのう」

『呼んでる俺を、すぐに行つてやる』

「映司！正気に戻りなさい」

あーだこーだしてるうちに校庭に出てきてしまった。

（映司は何処に行く気なのかしら？）

『ここだ、変身』

『サイ！ゴリラ！ゾウ！サゴーズ・サゴーズ！』

『いま出してやる』

『スキヤニングチャージ！』

『せいやあああ！』

映司が校庭をたたき割る。

『あれ？俺何を？なんで俺変身してんの！？』

「覚えてないの？」

『へ？なにを？』

「（覚えてない？）」

『これはそうか此処に封印されてたのか』

映司は亀裂に手を入れ何かを引きずり出す。

『あつた、これが封印されたままのコアメダル』

映司はそう言つて変身を解く。

くSIDE映司く

俺はメダルの蓋を開ける。

『プテラ、トリケラ、ティラノ、コブラ、カメ、ワニ、これがコンボに使うコアか』

そして俺は夢で言われたとうりに一つだけメダルを取る。

『これでいいはずだ』

するとコアが光だし中に舞いだした。

『何これ？』

『そうかこのコアはグリードにならないのか』

空中に浮いていたコアが俺の体の中に入ってきた。

『！、え、ちよつ体の中に入っちゃただけだ』

『大丈夫なの！？』

『大丈夫だ』

『ならいいんだけど』

（なんだ？このコアメダル取り出せるかな試してみるか）

『フン！』

体の中に手をつ込む。

『ちよつ！映司何やってんの！？』

『あ！取れたってことはグリード化はしないってことか』

『映司の体どうなってんのよ？』

『まあ大丈夫だろ』

『軽いわね結婚してくれるんだから死なないですよ？』

『分かってるよ言ったる生きてお前を幸せにしてやるって』

『うん／＼／』

（あ！そうだ心配させたから何かしてあげないとな、！、ちつよと恥ずかしいけどあれで行こう）

『優子／＼／』

『なに？、ん』

振り向いた優子に俺はすかさずキスをする。

『心配させたからな／＼／』

「映司／＼／」

『帰るか／＼／』

「姉上ゝ義兄上ゝ」

秀が向こうから走ってくる。

「大丈夫かのう？」

『心配かけたな』

そう言つて俺は秀の頭を撫でる。

「はにやゝ心地よいのじゃ」

なんか後ろから殺気を感じるから振り向くと殺気をまとっていた優子が立っていたのでなんで殺気をまとてるか理解した俺はあいてる手で優子の頭を撫でる。

「はふうゝ／＼／」

（二人とも猫かよ）。

「映司元に戻ったか」

「いきなり倒れるから心配したんだよ？」

『すまんどうやら800年前の俺に呼ばれたようだ』

「800年前の映司だと？」

「二人とも猫？」

『秀の方変わるか？』

「ぜひ！」

『ほい』

「何だろうな？秀吉の頭撫でると落ち着く」

「はふうゝ／＼／」

「本気で猫っぽいな」

「800年前の映司とはどういうことだ？」

『800年前のオーズが俺のご先祖様そしてオーズには奥さんが居たその奥さんは優子のご先祖様だったそれだけの話だ』

「そうなのか」

「はふうゝごろごろ／＼／」

『あ、完璧に猫になった』

「そうじゃ義兄上、父上と母上が許嫁なのだから同棲したらつと
つておつたぞ」

「「は？」」

「おい突然言うな見る明久と雄二の思考がフリーズしちゃったじや
ないか」

「はふうゝ気持ちいいにやゝ／＼／」

「優子、完璧に猫化しちゃったよ」

「うにやあゝ／＼／」

「いつそのこと無視しようでも大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃ妊娠させなければ」

「じゃあ帰るか」

「うにやあゝ／＼／」

「その前にこれを持っていくのじゃ」

「？、なんだこれ？」

「家に帰ってから開けるのじゃぞ」

こうして俺と優子の同棲生活が始まった。

第8話灼熱コンボと封印されたままのメダルと同棲！？（後書き）

いきなり映司が二つの種族のメダルの器になりました。
まさかの優子の猫化！（笑）。

第9話襲撃と恐竜コンボと暴走（前書き）

どーも巧です、今回秀吉のたくらみが分かります（笑）。
では第9話どうぞ。

第9話襲撃と恐竜コンボと暴走

「『ただいま』」

「今日からよろしくね」

『ああ、こちらこそ』

「ねえ、映司」

『ん？なんだ優子？』

「布団とかどうするの？」

『ああ、優子は俺のベッド使ってくれ、俺は布団で寝るから』

「それは映司に悪いよ」

『なんと言われようと決定だ』

「分かったわよそういえば秀吉に何貰ったの？」

『開けてみるか』

俺は秀に貰った袋から出すと手紙と包装された箱が出てきた。

『手紙だ呼んでみるか、義兄上よ、ほどほどにのう、秀吉』だつて

「ほどほど？」

『？意味がわからん箱開けてみるか』

包装用紙から箱をだすと『ピーー』のときに使うものが出てきた。

「『／／／』」

この空気本当にきつい。

（何がしたいんだ！？秀は！ん！まだ手紙が、よしこの空気から逃げ出せる！）

『ゆ、優子まだ手紙があった読むぞ！／／／』

「う、うん、呼んで／／／」

『えゝとなになにに『義兄上と姉上の子供を楽しみに待ってるぞ、秀』

吉』／／／』

「『／／／』」

さらにきつい状態に。

「映司／＼／」

『な、なに？／＼／』

「子供は何人ほしい？¥¥¥」

『（絶句）』

（なんてこと聞いてくるんですか！？優子さん！）

「映司？／＼／」

『（落ち着けとりあえず話を変えよう）優子晩御飯何が食べたい？』

「え！そうだな、じゃあお魚かな？」

『分かったじゃあ買い出し行ってくるね』

「うん（そうだ）」

（危なかった危つく押し倒すところだった）

俺は玄関を出てバイクに乗り買い物を済ませ家に帰る。

（俺の理性が持ちますように）

『ただいま』

玄関をあけると。

「おかえりなさい、ご飯にします？、お風呂にします？、それともア、アタシ？／＼／」

なぜか優子が裸エプロンで迎えてくれた。

（優子さん！？恥ずかしがるならやらなければいいのに！ってか優子にこんなこと教えたの誰だ！？は！秀ええええ！）

「え、映司？／＼／」

『優子をいただきます！／＼／』

「ひゃあ／＼／」

俺は優子をお姫様抱っこでベットまで連れていく。

『優子が悪んだからな／＼／』

そう言ってキスする。

「ごめんね、映司、お詫びに好きにしていよいよ／＼／」

（本当にまずいな）

そして俺達はまた体を重ねた。

「映司／＼／」

『な、なに／＼／』

「アタシ、今幸せ／＼／」

『俺もだよ、優子／＼／』

そして俺達はキスし抱き合って眠りについた。

『んあ…もう朝か、腹減ったな昨日晩御飯食べてないからか』

「ん…映司…大好き…」

寝言で俺の事を言ったので目を丸くする。

『嬉しいね、優子、俺も大好きだ』

優子の頬にキスすると俺は優子を起こさないようにベッドから降りる。

『シャワー浴びてこよ』

俺はシャワーを浴び制服に着替え朝ごはんの準備をする。

『うん今日の味噌汁もいい出来だ、さてと優子を起こしに行きますか』

俺は二階に上がり優子を起こしに行く。

『おい優子朝ごはんが出来たぞ』

「うゝん後5分…」

『なんつー分かりやすいリアクションでも朝ごはんが冷めちゃうからな。おい優子起きろキスしちゃうぞ』

「！……」

『あれ？今起きなかった？まあいいやキスしちゃうお』

俺は寝てる優子の顔に自分の顔を近づけキスする。

『起きないかじゃあもつとディープなのを』

「！……」

『起きてるだろ』

「ばれた？」

『早く起きろ朝ごはんが冷める』

「うん、分かってる」

優子起きる前に後ろを振り向き部屋から出る。

『そつだ体に異常ないか検査しよ』

まず血圧を測り体温計で熱を測る。

『うん、大丈夫だな』

「おはよう映司」

『ん？ああ、おはよう優子』

「わーおいしそー」

『おいしそーじゃなくて美味しいんだよ』

「『いただきます』」

「おいしー」

『そういえば優子は料理出来ないんだっけ』

「そうなのよねー」

『今度一緒に作るか？』

「うん！」

「『ごちそうさま』」

『そろそろ行かないとな』

「そうだね」

『そつだ優子これ弁当作ったからお昼に食べてくれ』

「ほんと！ありがとう」

『さて、行くか』

「うん」

俺達は窓を閉め、玄関にカギをかけバイクに乗り学校に向かう。

「バイクって以外にいいわね」

『ああ、風が気持ちいいしな』

「アタシは免許取らなくても映司が乗せてくれるもんねー」

『ああ、何回でも乗せてやるさ』

学校に着いたのでバイクのカギをかけ優子と別れFクラスに向かう。

『おはよー』

「ん？おはよー映司」

「早いな」

『まあな』

「はいのー義兄上（にやにや）」

『あはははは、秀君？なんでもにやにやしてるのかな？』

「（昨日も姉上とナニしたのかのう？）」

『やっぱりあれはお前がやったんだなひぐで』

「否定しないのじゃな」

『あの格好に耐えられる男が居るか、いやいない』

「一人で話すのはやめるのじゃ」

『だって本当の事だろってかなんだよあの贈り物！？それになんだよあの手紙！？今でもあの気まずい空気思い出せるわ！！』

「わしは本当の事を書いただけじゃ」

『逆効果だよ！？』

「（でも姉上とナニしたのじゃろ？）」

『したけどさ／＼／＼』

「何話してるんですか？」

「なにになに？なんの話？」

「んむ？いやただ義兄上がムグっ！」

『言わせねえよ！？火種はいつもお前だな！！』

「なにを言っておるんじゃ？ただ恋してる二人にじゃな」

『だったら３人しかいないところで話せ、いやそという問題じゃなかった！』

どおおおん。

『なんだ！？校庭か！？』

土煙がはれると見たのはメズールにガメルとウヴァが立っていた。

『くそ、グリードが３体！？』

窓から飛び降りる。

「あら、オーズの坊や死にに来たのかしら？」

「メズールのコア返せ」

「俺のコアもだ」

『取れるもんなら取ってみろ、変身！』

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！』

『お前らの欲望！俺が貰う！』

「こいオーズ！」

『いつてやらあ！』

「おりや！」

「はあ！」

「返せメズールのコア！」

『ぐあ！、さすがに3対1はきついか』

「さようならオーズ、はあ！」

その攻撃が俺から出てきた恐竜のコアメダルによって防がれた。

『プテラ！トリケラ！ティラノ！プ・ト・ティラノザウルス！』

『うおおおおお！』

「なに？」

「何？このメダル？」

「こんなグリード見たことないわよ」

『はあはあ、はあ！』

土の中に手を入れメダガブリューを出す。

『はあー、はあ！はあ！』

グリード達を切りつける。

「強い」

「本当ね」

「だが暴走しているな」

『はあ』

『スキヤニングチャージ！』

『はあ！』

ワインドステインガーでウヴァを貫く。

「うぐ！」

「ウヴァ！」

「逃げるわよガメル！」

『はあ』

冷気で凍らせティルディバインダーでウヴァを粉碎して、ウヴァのコアメダルを拾った。

『はあはあ』

「映司！」

『はあはあ』

「映司？アタシの声が聞こえないの？映司いいい！」

『はあはあ…優…子？』

「映司！アタシの声が聞こえる！？」

『優っ！うおおおおお！はあはあっ！、コアメダルなんか、コアメダルなんか、負けるかああああああ！』

俺は無理やり体を動かし変身を解く。

『はあはあ、もう体は渡さねえ、もし俺の意識を食うというなら逆にお前の意識を浸食してやる、覚えておけ』

「映司！」

『へ、うわあ！ゆ、ゆ、優子／／／』

「映司」

優子が泣きながら俺を強く抱きしめる。

『どうかしたのか？』

「映司がコアメダルにのまれたかと思った」

俺は優子をやさしく抱きしめる。

『大丈夫だコアメダルなんか俺はのまれない』

「でもものまれ掛けてたし」

『う！それはそのね』

（そうだ映司を困らせちゃおう）

「すうすう」

『へ？寝ちゃった？泣き疲れたのかな？』

「すうすう」

『とりあえず保健室に運ぶか？いや寝てるだけだからな、どうすればいいんだ？』

「すうすう（保健室良いんじゃないの？）」

『まあいいや保健室でいいか』

俺は抱きついてる優子をゆっくり振りほどいてお姫様抱っこで保健

室に運ぶ。

『お！ラッキー誰もいない』

俺は優子をベットに寝かしFクラスに戻ろうと思い離れると優子が制服を掴んでいて離れられないのでそこに居ることにした。

『俺もプトティラコンボのせいで疲れた』

俺は優子が寝ているベッドにもたれかかると眠りに着いた。

第9話襲撃と恐竜コンボと暴走（後書き）

変なところで切りました。

第10話脅しと清涼祭？何それ？食えんの？と婚約者（前書き）

一日開けてすみませんよかったら新作の小説読んでください。

第10話脅しと清涼祭？何それ？食えんの？と婚約者

『ん…』

目を開けると入ってきたのは優子のドアップの顔だった。

（はいいい！？おかしいぞ！俺椅子で寝たはずなのになんで添い寝してんだ！）

『落ち着け今何時だ？4時か帰らないとな、優子起きろ』

「ん…」

『無理かしようがないおんぶすればいいか』

俺はベッドから降り優子をおんぶして保健室から出る。

『相変わらず軽いな』

俺は優子の体重の軽さを心配しながらFクラスに向かい足でドアを開ける。

『ただいま〜つてか』

「んむ？義兄上なんで姉上をおんぶしてるのじゃ？（にやにや）」

『寝ちゃったみたいだからなところで、秀なんでお前はにやにやしてて、島田と姫路は顔が真っ赤で、康太は鼻血で倒れてて、明久と雄二は俺に向かってカッターを投げようとしてるのかな？』

「それはじゃなこの写真を見せたからじゃ」

秀が俺に見せたのは俺と優子が寝てる写真だったはたから見ればただの添い寝だろう、俺が裸じゃなければ。

『秀えええええ！なんて物見せてるの！？第一何時そんな写真取った！？』

「ヒントを上げるのじゃこの写真を撮ったときベッドに血が」

『ヒントどころか答えじゃねえか！あれか最初のナニの時のかよ！』

「ついでに別の写真も見せようかと思うのじゃが」

『駄目に決まってるんだろ！雄二、明久カッターを今すぐ下ろせさもなくばお前らの好きな人を校内放送でばらす！』

「「すいませんでしたあ！」」

「「アキ（明久君）が好きな人って誰（ですか）！？」」

「……映司その話詳しく」

「言わねえよしかもあねさん何時の間に来てたの？」

「……今さっき」

「いいじゃないですか教えてください！」

「そうよ瑞希の言う通りよ！」

「言わねえよ明久達の気持ちも少しは考えろお前らだって言われたら嫌だろ？」

「「……」」

「義兄上にかかれば島田と姫路もおとなしくなるのう」

「それと秀今度から俺と優子の話するなら俺も呼べ、答えられないところもあるがたいいていの事なら答えてやる」

「了解じゃ」

「それじゃあさっそく」

「なんだ？島田」

「実はアキに必殺仕事人見たいに思われてないかな？っと思って」

「それは暴力をやめれば明久も思わなくなるだろ」

「それじゃあ鴻上君明久君が私が作ったお弁当をあまり食べないんですよ」

「まずレシピを聞こうか」

「はい、まずは普通に作って隠し味に硫酸やクロロ酢酸を」

「まず薬品を入れるのをやめろそんなものを明久に食わすな、それと明久救世主を見つけたような目をやめろ」

「瑞希料理にそんなもの入れてたの？」

「？普通の事ですょ？」

「姫路薬品を入れなければ（明久もお前に惚れるぞ）」

「はい入れません！」

「じゃあ俺帰るわ」

「え！もう少しだけ」

『じゃあ俺の家来るか?』

「へ?良いんですか?」

『ああ、構わないぞお前達も来るか?』

「うん、行く」

「行かせてもらうか」

「優子と鴻上の愛の巣に行かせてもらうわ」

「わしも行くのじゃ」

『雄二、康太起こしてくれるか?』

「ああ、分かった、おいムツツリーニ、姫路のスカートがめくれているぞ」

「……フン!何処だ!?!」

『康太お前も俺の家に来るか?』

「……行かせてもらう」

「……映司私も」

『ああ構わないじゃあAクラスに行つて優子の鞆取つてこないと』
そして俺達はFクラスを出Aクラスに行き鞆を持ち学校から出る。

「義兄上」

『なんだ秀』

「家から遠くなつておるんじやが」

『ああ、当然だ俺の本当の家に向かつてるんだからな』

「本当の家だと?」

『俺の家は優子の隣ともう一つあるんだよさすがにこの人数じゃ俺の家は狭いからな』

「まさか家つてあれかのう?」

秀が指差したのは大きなビルだった。

『何言つてんだよ秀』

「そ、そうじゃなさすがにあそこでは」

『あそこに決まつてんだろ』

「……でかあああああ!」「……」

『絶叫しないで早くしろ』

「秀吉お前行った事無かったのか？」

「う、うむ母上の話だと昔一回行ったらいいのじゃが記憶に無いのじゃ姉上は何回も言ったらいいのじゃが」

「あねさんも何回も来た事があるぞ、なああねさん」

「……うん」

「それにしてもでかすぎないか？」

「父さんがでかいものが好きなんだよちょっと待ってる今開けるから」

「裏口から入るのか？」

「正面から入ると社員がうざいんだよね」と俺の部屋でいいのか？」

「それ以外にあるのか？」

「ああ、あるぞ射撃場にシアタールームに書斎に雄二を匿うための場所に」

「ちよつと待てなんで俺を匿う場所があるんだ？」

「いや、たまに雄二がかわいそうに見えるからな」

「ありがとう映司お前は最高の親友だ」

「とうぜんだ後道場にぬいぐるみが大量にある場所に完全防音の部屋に」

「もういいからお前の部屋に案内してくれ」

「了解、あ！父さん！ただいま」

「ん？おお！我が息子映司！帰ってきたのか！画面に映った時振りだな！」

「俺と優子今日止まってくから」

「分かっている！そうだ映司」

「ん？なに？」

「避妊はちゃんとするんだぞ」

「父さん何言つてんだ！？そんな事百も承知だ！」

「おい映司、突っ込み方間違えてないか？」

「そつだお前達も泊ってくか？」

「へ？いいの？」

『ああ、その代わり勉強会するけどな』

『でも私たちが着替えが無いし』

『そんなもんこっちで用意するが』

『俺は泊つてく戦力を強化したいしな』

『じゃあ僕も』

『わしも泊るかの』

『……俺も』

『私も泊ります』

『ウチも泊るわよ』

『じゃあ決まりだな』

『その前に義兄上』

『なんだ？』

『部屋は割はどうするのじゃ？』

『うゝんそうだな（あねさんがなんか考え付いたみたいだな面白くなりそうだからあねさんに振るか）あねさんなにかある？』

『……テストの点で決める』

『いいね（つてことは俺、あねさん、姫路、優子、雄二、康太、島田、秀、明久の順だな）』

『駄目よ！』

『……なぜ？』

『それだったら瑞希とアキが一緒の部屋になっちゃうじゃない！』

『じゃあ無難に女子、男子でいいか、あ！もちろんあねさんと雄二には違う部屋を用意するからね』

『やめろ！そつだ映司お前中華料理作れるか？』

『作れるけどそれがどうしたの？』

『清涼祭で作ろうつと思つてな』

『清涼祭？何それ？食えんの？』

『お前知らなかったのか？』

『いや、ヤミー退治に忙しくてさあゝ、あはははは』

『「「「「（わ、笑えない！）」「」「」』

『まあいいやとりあえず優子寝かしてくるこの先まっすぐ行つてリビングに出るから』

「あ、ああ、行つて来い」

俺はみんなと別れ自分のベッドに優子を寝かすとリビングに向かう。
『待たせた…な？』

俺が見たのはあねさんにアイアンクローをされてる雄二、姫路と島田に説教されてる明久、鼻血を出し倒れてる康太、それをにやにやしながら見てる秀、そしてその状況を作りだしたであろう女の人が立っていた。

『なにこの状況？』

「鴻上君最低です！優子ちゃんがいるのにこんなにきれいな人がいるなんて！」

「そうよ鴻上サイテー！」

『おい、何勘違いしてやがる母さんまたなんかおかしな事言つたんだろ』

「あらあら4年ぶりね映司」

「お母さん！？」

「若すぎない！？」

「なんだと！？」

「こんなにきれいなのに！？」

『母さん今度は何を言つたんだ？』

「私はただ赤い髪の子と茶髪の子とあそこで倒れてる子に「かわいいいわね私と保健体育の実技しない？」って言っただけよそのあと毎晩映司としてるからってね」

『はあゝ頭が痛い第一なんで保健体育の実技で康太は鼻血を出すんだよサッカーやバスケットだろ？』

「義兄上、保健体育の実技とは姉上と毎晩ナニしてる事じゃよ」

『ちげえよ！？毎晩はしてねえよ！』

「おい！否定する場所間違えてるぞ」

「雄二、やっぱり処刑しよう」

「たまにしてるんですね」

「赤飯炊いて食べたましたか？秀君」

「うむ、食べたのじゃ」

「あれ？なんでみんな居るの？」

『優子起きたのか』

「うん、お義母さんお久しぶりです」

「あら？優子ちゃん胸が大きくなってない？映司とナニしてるおかげかしら」

「ふえっ！ほ、本当ですか？／＼／」

『そういえばおんぶした時、胸の感触が違ったような』

「映司まで／＼／」

「明久もう我慢できねえ！FFF団に連絡だ！」

「OK雄二任せて」

『姫路、島田、あねさん、明久と雄二が好きな人は』

「「すいませんでしたあ！」」

「あれ？お兄ちゃん？あ！秀！」

「ん？比奈か久しぶりだな」

「比奈！？もう体は大丈夫なのかのう！？」

「うん！治った」

「「誰だその子！？」」

『俺の妹だ』

「鴻上比奈です、ちなみに秀の恋人です」

「比奈、恋人じゃなくて婚約者だろ」

「あ、そうだったね」

「「なに！？」」

「そんな～秀吉は僕の事嫌いなの？」

「……見損なった」

「なぜわしが責められるのじゃ？」

「気にしたら負けよ」

「そうだ秀、私こんど文月学園に入学するんだ」

「ほんとかのう！？でも比奈は頭がいいからのうAクラスじゃろ」
「違うよFクラスだよ」

「なぜじゃ！？」

「いやゝ名前書き忘れちゃって」

「比奈ゝ何処行つたのゝ」

「あ！お姉ちゃん」

「あ！居た！もう心配させないであれ？兄貴？、！、アキなの？」

「陽菜なの？」

「ん？お前ら知り合いか？」

「兄貴、前に話したでしょ？あたしの婚約者の話」

『ああ、公園であつて一目惚れして遊んで結婚の約束したつてやつか』

「ちよつとおおお！そこまで言わないでよ！／＼／＼」

「「アキ（明久君）向こうでO H A N A S H Iしましょ（しますよ）」」

『やらせるか俺の妹の婚約者なら明久を守る』

「ありがとう映司」

『陽菜、明久を連れて逃げるこの鍵を使え』

「兄貴、ありがとう行くよアキ」

「え！うん」

『とりあえず陽菜の代わりに自己紹介を俺がしておこうあいつの名前は鴻上陽菜、比奈の双子の姉、明久の婚約者だ』

「どきなさい鴻上！」

「どいてください！」

『どかないぜ何時もなら見捨てるが俺の妹の婚約者なら話は別だ』

「……手伝つ」

「わしも手伝おう」

「アタシも」

『ありがとうあねさん、秀、優子』

「なんで邪魔するのよ！」

「優子ちゃんに翔子ちゃんに木下くんまで邪魔しないでください！」
「わしはのう将来の義兄上に怪我をさせるわけにはいかないのじゃ！」

「……鴻上家とは家族同然、吉井が陽菜と結婚するんだったら吉井も家族」

「アタシの場合は義妹を泣かしたくないの」

「もうどいていいぞ逃げれたみたいだからな」

「「そ、そんなあああ！」」

「（ところで何処の部屋の力ギ渡したの？）」

「（雄二をかくまう場所だあそこならたいいの食材があるからな）」

「（なるほど）」

「さっご飯にしようぜ」

「明久達はいいのか？」

「（明久達が行った場所には食材があるからな）」

「なるほど」

「ご飯ご飯」

「ご飯なら明久君達を呼んでください！」

「その通りよ！」

「大丈夫だ明久達に向かわせた場所に食材があるからな適当に作るだろうあ、そうだ」

俺は携帯を取り出し陽菜に電話する。

「もしもし兄貴どうかしたの？」

「いやお前らに言うの忘れてた事があるの忘れてた」

「？、何？」

「そこでナニするんだったら避妊はちゃんとしろよ」

「な、何言ってるの！！この馬鹿兄貴！！／／／」

「どうしたの？陽菜いきなり怒鳴って？」

「なんでもないわよ！」

「そうだスピーカにしてくれ」

『分かったわ』

『明久聞こえるか？』

『うん、聞こえてるよ』

『明久、そこで陽菜とナニするんだったら避妊はちゃんとしろよ』

『な、何言ってるの！／＼』

『それだけじゃあな』

携帯を切りみんなの方を向くとドン引きしていた。

『義兄上さすがにそれは』

『比奈双子だから陽菜が何考えてたか分かってたろ？』

『え！うん明久を押し倒そうと考えてたね』

『さすが陽菜、大胆だ』

『陽菜あの子そんなに大胆だったかしら？』

『どんな空気になってるか確認しに行こうぜ』

『行かないわよ！』

『優子よく考える義妹がナニするか気にならないか？』

『く！確かに気になるわね』

『私は行く』

『わしも行こう』

『行こうぜ！姫路達はご飯食べといて』

『なぜですか！？私達も行きます！』

『駄目だまず雄二はナニを見たらあねさんに既成事実を作られるとして姫路と島田はせつかくのムードを壊すと言うことでダッシュ！』

俺達走り出す後ろで俺達を追いかけてようとしていた姫路と島田が雄二達に捕まっていた。

くSIDE吉井く

（まずいよ久しぶりにあって可愛いと思ったのに映司があんな事言うから変な空気になったじゃないか）

『アキ…そのしたい？／＼』

『う…／＼（可愛い！まずいよ理性が崩壊する）』

『あたしはアキならいいよ／＼』

「陽菜：／／／」

僕は陽菜の顔に顔を近づける。

「ん、アキ／／／」

「可愛いよ陽菜／／／」

ガチャ！。

「お嬢様ご飯が……お邪魔しました」
ボタン！。

「「ちよっ！誤解だああああ！」」

「SIDE映司」

「馬鹿せつかくのムードを」

「はあく帰りましょうか」

「そうだな」

俺達はメイドがせつかくのムードを壊した事を怒りながらリビングに戻った。

番外編俺とバカと歌自慢大会（前書き）

巧です、今回本編とは関係ありません（笑）。

番外編俺とバカと歌自慢大会

『歌自慢大会?』

「今日、文月学園でやるらしいわよ」

『まあ、俺には関係ないな』

「あら、あるわよ」

『まさか、優子、俺を勝手にエントリーしてないよな』

「エントリーしてたらどうする?」

『お前を今日の夜めちゃくちゃにしてやろう』

「／／／」

『登録したな』

「した／／／」

『まあいいか（今日の夜楽しみにな）』

「／／／」

俺が耳元で呟くと優子は顔を真っ赤にした。

『行くぞ、遅れちゃダメだろ?』

「え!そ、そうね!」

学校に向かい優子と別れFクラスへ向かう。

『はよ』

「『『『異端者に死の鉄槌を!』』』」

『待て、話を聞かせろ』

「みんな落ち着け、こいつまったく分かってないから少し猶予をやる」

『これはどういうことなんだ?』

「ムツッリーニ」

「……これを」

『それってボイスレコーダー?』

「その通りだ録音されてる物を流すぞ」

『ピッ』まさか、優子、俺を勝手にエントリーしてないよな?』

エントリーしてたらどうするの?』

『おい! 待て! いつ取った!?』

つと叫ぶといったん止めて雄二が答える。

『秀吉が取った』

『秀、何してんの!?』

『いや面白かったものでついじゃ』

『ついじゃねえよ!』

『続き流すぞ』

『ピッ』今日の夜お前をめちゃくちゃにする』／／／『したんだな』した／／／『まあいいか(今日の夜楽しみにな)』

『ここまで取れてた』

『秀えええええ! なんてことしてくれてんの!? はずいじゃん!』

『これは本物か』

『はっ! しまった、こうなったら、秘儀『買収』俺に攻撃しないなら秀吉の寝顔の写真をプレゼントだ!』

『...』しません!』...』

『じゃあこれを贈呈しよう』

『...』うおおお!』...』

『俺は騙されないぞ』

『お前の場合、手を出したら痺れ薬を飲ませてあねさんに渡す、あねさんのことだ既成事実作るだろ』

『お前、ひどくないか!?』

『雄二お前も歌自慢大会に出るのか?』

『無視かよ!? まあいい出る』

『そうか、雄二、歌上手そうだな』

『そうでもないぞ』

ピンポンパン。

『歌自慢大会に出る生徒は至急、体育館に来てください』

『映司、お前に言う事がある』

『俺もだ』

「『絶対負けねえ!』」

俺達は体育館に向かう。

「えー本日はよくお越しくださいました司会の新野すみれです」

「学年主任の高橋洋子です」

「審査員席には2・A木下優子さん同じく2・Aの霧島翔子さんそして2・Aの久保利光君そして2・F土屋康太君です審査員の皆さんには点数を付けてもらいます、優勝のペアには如月グランドパークのプレミアムチケットをプレゼント」

ん?今ペアって言わなかった?

「映司、今ペアって言わなかったか?」

『うん、言ったね』

「俺と組んでくれ映司」

『そのつもりだよ賞品欲しいし』

「じゃあさっきの言葉を変えるか」

「『絶対に勝つぞ!』」

「最後のペアです、2・F坂本雄二君、鴻上映司君です」

こんな事してる内にもう最後!?しかも俺たちかよ!?

「行くぞ」

『ああ』

「では歌っていただきました曲はRide on Rign t t i m e」

音楽が流れ出し俺達はマイクを構える。

(雄二以外に歌上手いな俺も負けられないな)

(以外に映司うまいな)

(何にしても……なんでこんなに観客が多いんだ!)

ざっと数えて200人ほぼ全校生徒、そして俺達は歌いあげた。

「いやー驚きました」

「そうですねまさかこんなにうまいとは思いませんでした」

「審査員の方の点数見てください満点です」

「優勝者は坂本、鴻上ペア」

「『じゃああああ！』」

俺と雄二が歓喜の声を上げる。

「『疲れた』」

次の瞬間その場に座る。

「楽しかったな映司」

『ああ、おもしろかった』

「優勝賞品の如月グランドパークのチケットです」

『ありがとう』

「映司やる」

『いいのか？』

「それ一人分だろ木下姉と楽しんで来い」

『サンキュー』

雄二からチケットを受け取る。

『優子の所に行くか』

俺は審査員席に向かう。

「映司お疲れ様」

『ああ、ほい如月グランドパークのチケット今度デートに行こう？』

「うん」

俺は優子と別れてFクラスに戻り授業を受け優子を迎えに行く。

『おじゃまします』

「うん？確か仮面ライダー君」

『確か工藤だったか康太の事が気になってる』

「な、何言ってるの！？／＼／」

『顔が赤いぞ』

「そついう仮面ライダー君は優子とどうなの？」

『どう言われてもな』

「優子とナニとかするの？」

『いつ！／＼／』

「どうしたの？（にやにや）」

『そのしますけど／＼／』

「いい情報ゲット」

『無駄無駄、Fクラスではばれてるから』

「ばれてるんだ」

『秀がばらしてな死にかけた』

「苦労してるんだね」

「映司迎えに来てくれたの？」

『ああ、工藤またな』

「じゃあね仮面ライダー君に優子」

Aクラスを出バイクに二人乗りし家に帰り晩御飯を食べる。

『（さあお仕置きタイムっ）優子』

「なっん／／／」

『言ったよね今日の夜めちゃくちやにするって』

「んっ／／／」

舌を侵入させる。

「ん！…はあ…ちゅ…／／／」

『可愛いよ、優子行こうか』

優子をお姫様抱っこして寝室に運ぶ。

「映司…／／／」

『今日手加減出来ないからな』

「待って手加減しっん／／／」

『無理』

「そんなあ」

その後優子をめちゃくちやにしたのは言うまでもない。

番外編俺とバカと歌自慢大会（後書き）

歌詞の無断使用すいませんでした

第11話勉強会と部屋割と体の異変（前書き）

どーも巧です、更新遅れてすみません。

第11話勉強会と部屋割と体の異変

「ご飯を食べ終たので。」

『さあ勉強するぞ』

「アキは？」

「うわー、島田から黒いオーラが見える。」

『安心しろ、今頃陽菜と勉強してるかいいい雰囲気になってナニをしてるかのどちらかだ』

「それはいいのか？」

『妹が幸せならいい、ちなみに部屋割だが島田と姫路、秀と比奈、あねさんと雄二、俺と優子、康太は明久の所か秀の所に入るかのどちらかだ』

「……秀吉」

『了解した』

「明久君は何処で寝るんです!？」

『もちろん陽菜の部屋だ』

「駄目よ!!」

『島田、なぜだ?』

「なぜってそりゃあ年頃の男女だし」

『大丈夫だ明久は陽菜の傷つくことをしない目を見れば分かる』

「そう言う事じゃなくて!」

『何を言ってるんだ? 島田、お前はこう言ったんだぞ年頃の男女だから駄目と明久はああ見えてへたれだからそうそう手は出さない、なにも問題ないだろう? それに明久を姫路と島田の部屋には行かせられないし』

「映司すごい屁理屈だな」

『? そうか?』

「まあいい、勉強するぞ（なんか変な感じがする）」
俺達は勉強をし始めるその時電話が鳴る。

『すまん構わず続けてくれ、もしもし』

『隊長グリードです』

『すぐに向かう!』

電話を切りすぐに立ち上がり走る。

『そうだ明久に電話』

明久の携帯にコールする。

『どうしたの映司?』

『明久グリードが出た!』

『本当!? すぐに行くよ!』

電話を切って明久の元へ向かう。

『映司遅くなつた!』

『さつさと行くぞ!』

廊下を走り外に出バイクに乗り走り出す。

『『変身!』』

『パカ』

『タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ!タトバ!タ・ト・バ!』

俺達は変身しバイクを走らせる。

『あれはガメル』

『オーズ、メズールのコア返せ』

俺はそのままバイクを当てる。

『痛い』

『お前の欲望、俺が貰う』

『さあ、稼ぎますか』

俺はパンチを食らわす。

『そんな攻撃効かない』

『パワーにはパワーだ』

『サイ!ゴリラ!ゾウ!サゴーズ・サゴーズ!』

『はあ!』

ガメルにパンチを食らわす。

『俺のコア』

『明久、こいつ拘束してくれ』

「分かった」

『パカ。クレーンアーム』

「離せ」

『これで決める！』

『スキヤニングチャージ！』

『うおおおおお！せいやあああああ！』

どおおおおん。

『これでガメルは倒した残るグリードは3体』

「もうすぐグリード達が倒せるね」

『そうだな、帰るぞ明久』

「了解」

俺達はバイクに乗り帰る。

（あの感じはグリードが出た事を示してたのかってことは俺の体が変わってしまったのか）

そんな事を考えながら俺達は家に帰った。

『ただいま』

「おかえい映司」

『あれ？みんなは？』

「お風呂よ」

『俺も入ってくるか』

「そうしなさい」

俺は風呂場に向かい服を脱ぎ入って頭と体を洗い風呂場から出た。

『疲れたさつさと寝よう』

歯を磨き俺の部屋に向かいベッドに入った。

『ん？そう言えば優子は？』

布団に入り気がつく。

『探すか』

俺の部屋からで優子を探す。

「優子ちゃんどうなんです！？」

「教えて！」

「え〜と／＼／」

なぜか姫路と島田に尋問されてる優子を見つけた。

『何をしてるんだ？』

「ん？映司帰ってたのか」

『雄二、何時の間に俺の隣にいた、それにあれはなんだ？』

「秀吉が爆弾を投下した」

『またか今度はどんな？』

「お前が木下姉にプロポーズの話をちゃっただけしてにやにやしなから部屋に戻った」

『頭痛てえ』

「……頭痛薬あるけど飲む？」

『そう言う事じゃないってーか、康太、何時の間に俺に後ろに立っていた、優子、先に寝るぞ』

「え！待ってアタシも寝る」

「待ってください！」

「教えてよ！」

『はあ〜で何を聞きたいんだ？』

「そこまで相手を思えるのはなぜですか？」

『？何当然の事言ってたんだ、俺は優子を愛してる優子も俺の事を愛してくれてる、ただそれだけだ』

「／／／」

「恥ずかしくない？」

「うらやましいです」

『恥ずかしくは無いぞ事実を言っただけだからなもういいか？』

「ええ」

「さすがにこれ以上は鴻上君寝むそうですし」

『じゃおやすみ』

俺は優子の手を握り俺の部屋に向かう。

『眠い』

「お疲れ様／＼／」

『顔赤いぞ?』

「気にしないで／＼／」

『?さつさと寝よう』

俺は部屋のドアを開けベットに横になる。

『おやすみ優子』

「おやすみ映司」

俺はさっきの疲れもありすぐに眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0995u/>

俺と優子とオース

2011年8月2日03時41分発行